

死にたくないから生きて  
るだけで

猿も電柱に登る

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

重いタイトルですが、私に重たい作品が書けるとは思えないので、その試験場のようなもの。

タイトルはウマ娘のお話での主人公の信条みたいなものなので、競走馬時代では活かせない予定？

要するに、転生オリ主ウマ娘という数千回繰り返されてきた輪廻の輪っかに乗っかるだけのお話。

# 目次

100000UA記念 ウマ娘実装時の 掲示板	1
50000UA記念 掲示板回 ネタ	25
バレ注意	25
畜生道で輝く	25
二階級降格	56
不幸な馬	64
我輩は馬である	73
幸福な馬	82
走れサチ	94
運命の馬	102
新馬戦	111
初勝利は無音の拍手	124
お別れの馬	132
親分との出会い	140
おかしな馬	148
秋桜の咲く場所で	158
聴こえなくとも	170
人道もわりと救えない	170
入学式は睡眠時間	181
偶然の出会いは必然に	191
出会うは相棒か足枷か	201
大胆な告白は美少女の特権	212
契約成立は断れない	221

夢というもの

勉強会はサボる口実

修行パートは消されがち

271 256 237

# 10000UA記念 ウマ娘実装時の掲示板

ウマ娘総合スレ 【祝】 ジャポーネ実装

1：名無しのトレーナー ID：WK5Ed4dOP

実装おめでたいので勢いでスレ立て、ジャポーネについての雑談ならなんでもええけど、批判と喧嘩はダメやで！

2：名無しのトレーナー ID：OQaNvqWHD

スレ立ておつ、オグリ世代の化け物筆頭ようやく実装か

3：名無しのトレーナー ID：UJnoKW6sS

タマモクロス「嘘やろジャポーネ……」

4：名無しのトレーナー ID：mPDgJlIoS

これに関しては狙ってただろ運営

5：名無しのトレーナー ID：B7N7PEU0W

運営 『次に実装するウマ娘はこの季節に伝説を作った競走馬です』

6：名無しのトレーナー ID：8jp490ps6

天皇賞(秋)だな、なら春秋制覇のタマモクロス実装だ！、からの『オレンジーネ』が凱旋門取ったから予定変更

7：名無しのトレーナー ID：hpPJx462

言うて凱旋門もほぼ同時期だから普通にこの時期に実装予定だったろ

8：名無しのトレーナー ID：ZRB03Thor

シングレだと弱そうないメージなんだけどそんなにすごい馬なん？

9：名無しのトレーナー ID：1Z0dRu362

お前逆に知らないの

10 : 名無しのトレーナー ID : Y v p J v Q I u w  
 喧嘩腰は止めとけ

11 : 名無しのトレーナー ID : Z R B o 3 T h 0 r  
 すまん、ウマ娘から競馬に入った初心者なんや……

12 : 名無しのトレーナー ID : j o w H N J / e L  
 日本初の凱旋門勝利馬だぞ。第二次競馬ブームを引っ張っていった一頭。

13 : 名無しのトレーナー ID : T 6 q f l w 7 h b  
 出鱈目に初速が遅い馬で引き換えに気持ちが悪いスタミナと加速をしてる。

14 : 名無しのトレーナー ID : 4 1 0 / t J x 5 B  
 というか肩書きは外国荒らしの方が正しくないか？

15 : 名無しのトレーナー ID : O F + d g 8 Q l a  
 凱旋門は孫も取ったから分かりやすさならそつちかもね、その肩書きだとわかりにく

いし

16 : 名無しのトレーナー  
ID : p2im+Kj16  
たし蟹

17 : 名無しのトレーナー  
ID : ZRB03Th0r  
すまん、ありがとう

18 : 名無しのトレーナー  
ID : WPIVz1Szb  
素直におかしい経歴の馬ではあるから覚えておいて損はないぞ。

19 : 名無しのトレーナー  
ID : dtGVkhAHz  
やさしいせかい

20 : 名無しのトレーナー  
ID : rmHlqB1CN  
やさしいせいかつ



21 : 名無しのトレーナー ID : 8Y9WcxDjv

あえてここでテンプレを切断するが、ジャポ―ネあんまりにも可愛すぎないか？

22 : 名無しのトレーナー ID : lHjpUqTXi

えっ？、なんかめっちゃ辛辣やつたけど……

23 : 名無しのトレーナー ID : PuZg3Q3lU

あー、お前お姉さまで遊んでるだろ

24 : 名無しのトレーナー ID : lHjpUqTXi

せやな

25 : 名無しのトレーナー ID : g+mmpCAuQ

たぶんリアルで育児放棄された話と父親と仲良しなエピソードからストーリーが性別で変化するっぽい

26 : 名無しのトレーナー ID : MRrC85ZYT

へー、そんな話があったんすね〜

27 : 名無しのトレーナー ID : u9IXGJQjh  
せやで、何かファザコンっぽい性格もその辺から来てるんやろうな

28 : 名無しのトレーナー ID : oUr7PWldy  
でも育成ストーリーで女トレーナーにするとお母さん呼びをしてくるからそっちは  
そっちでかなりええで

29 : 名無しのトレーナー ID : 7TqzD49OV  
まじ？、俺今からお姉さまになるわ

30 : 名無しのトレーナー ID : GaAUynp7F  
オネエさまの間違いやろ

・

127 : 名無しのトレーナー ID : k + 9 X H 8 e r v  
 結局だけど性能はどうなん？

128 : 名無しのトレーナー ID : x C N / 7 n M + d  
 なんかレース見てるとバグかと思うけど普通に強いで

129 : 名無しのトレーナー ID : y z p E + W 5 U 7  
 ん？、どんな感じなん？

130 : 名無しのトレーナー ID : B P c S l g L f 9  
 おっ？、育成ウマ娘のレース見ない皆かお前は

131 : 名無しのトレーナー ID : O i f s T Z K Q U  
 んにや、俺のスマホに実装してくれない

132 : 名無しのトレーナー ID : USEHU02hf

あつ……(察し)

133 : 名無しのトレーナー ID : OifstZKQU

天井したいと思えるほど思い入れのある馬じゃないし……。

134 : 名無しのトレーナー ID : UswMpftr

まあ、おっさん世代に人気な馬のイメージはあるからしゃーないかね

135 : 名無しのトレーナー ID : xCN/7nM+d

ん……、話を戻してもええか？

136 : 名無しのトレーナー ID : JlfqMO6NV

待ってくれとつたんかい！、ありがてえ……

137 : 名無しのトレーナー ID : xCN/7nM+d

よし、んじやステータス紹介やな、スタミナに20%補正とスピードに10%補正の

## 優良ステ

138 : 名無しのトレーナー ID : s2R91A6W4  
 おお、ええやん

139 : 名無しのトレーナー ID : xCN/7nM+d  
 距離適性は中距離はB、長距離がA適正で短距離とマイルはG適正の悲しみ

140 : 名無しのトレーナー ID : C8Vmhvqr  
 逆にマイルでも適正があるのはおかしい馬だから正常だよね

141 : 名無しのトレーナー ID : xCN/7nM+d  
 でもダート適正はCやで！

142 : 名無しのトレーナー ID : 9PjS/kYBd  
 宝の持ち腐れもいい加減にしろ！

143 : 名無しのトレーナー ID : V y q T 0 / O w F  
洋芝を反映した適正なんだろうけどそれでもいらぬ適正じゃないかな？

144 : 名無しのトレーナー ID : Q K j e N K l b 7  
あー、そうやったダートは実質マイルやったな……

145 : 名無しのトレーナー ID : r L d 3 6 w Y m L  
まあこれに関しては仕方ないな、それで何でバグかと思ったんや？、正直それが気になるんや

146 : 名無しのトレーナー ID : x C N / 7 n M + d  
おっと、そうやった。驚くなかれ！、脚質適正は『逃げ』がAで『追い込み』がAや  
！

147 : 名無しのトレーナー ID : S H e / F A Q l X  
?????????

148 : 名無しのトレーナー ID : pYiuwywCd  
 なんだろう相反する適正を両立するの止めてもらっていいですか？

149 : 名無しのトレーナー ID : XPYIKNrkf  
 (そんなに違和感ないなと思った) 自分に驚いたよね

150 : 名無しのトレーナー ID : lyRXvA4xa  
 某さんの語録の使うのは止めるんだ！

151 : 名無しのトレーナー ID : lhecBGxtA  
 実際、素人目で見ると追い込みにしが見えないんだけど、実際は全力で走ってるから逃げることか…、てことはそのバグはもしかして

152 : 名無しのトレーナー ID : xCN/7nM+d  
 せやで！、逃げにしたはずなのに順位が13位スタートやったからな！

153 : 名無しのトレーナー ID : mQIaxRx7t

あー、それは本家再現か、さすがやな運営

154：名無しのトレーナー ID：T G u D P J x N +  
競馬初心者にも優しく教えてくれないっすか……

155：名無しのトレーナー ID：j M s H 5 5 k J D  
ええよ、それじゃ、あと頼んだ

156：名無しのトレーナー ID：H A V m 3 V k G p  
丸投げかい！、まあええよ、ジャポーンって馬は加速が遅い……、んにや遅いとは違  
うな説明するの難しいは

157：名無しのトレーナー ID：A n S p + O b u f  
シンプルにスタートが苦手でもいいんじゃない？

158：名無しのトレーナー ID：H A V m 3 V k G p  
んにや、スタートはむしろ得意だからなんともいえないうんよ



159 : 名無しのトレーナー ID : M V m j 6 G K X t

んー、古い車って言えばわかるかな？、暖まるまでが遅いから速度が出るのが終盤になるんだけど、本馬は全力で走り続けてるんよ

160 : 名無しのトレーナー ID : T G u D P J x N +

？、つまり本気を出し続けていないと弱いタイプってことでええの？

161 : 名無しのトレーナー ID : v z I M Q i 9 a Z

せやな、勝負が長いほど圧倒的なレースになるタイプの馬だから長距離最強とか言われてたで

162 : 名無しのトレーナー ID : T 3 o f T G K V X

長距離最強？なんだそれは！

163 : 名無しのトレーナー ID : v z I M Q i 9 a Z

くくく、それはな、ウマ娘のレース見てたらわかるかもしれないけど、第三コーナー

でござう抜きするのを見てないかな？

164 : 名無しのトレーナー ID : OkZ0aSuVm  
うむ、そうやったけど

165 : 名無しのトレーナー ID : vzIMQiaZ  
距離が遠くてもスピードは落ちないどころか延々と加速し続けていくんやけど、コーナーでもスピードが落ちないから長ければ長いほど強いつて言われてたんや。

166 : 名無しのトレーナー ID : rQZ16eb50  
はー、勉強になるっすねー

167 : 名無しのトレーナー ID : vzIMQiaZ  
そいで第三コーナーに差し掛かる頃には普通の馬じゃ太刀打ちできなくて、それに2400mより長ければ並みの馬は勝てないからこの異名が付いたらしい

168 : 名無しのトレーナー ID : GTuVN3263

でもそれって逃げ適正に分類されるん？

169 : 名無しのトレーナー ID : A R 8 I h W O a q  
たし蟹おかしいな……、どうしてそうなったんだ……

170 : 名無しのトレーナー ID : e T y y 4 C I W 0  
たぶん主戦騎手のせいかな……

171 : 名無しのトレーナー ID : T / M b D J w 2 I  
主戦騎手ってあの人か……

172 : 名無しのトレーナー ID : S i b M 6 K m P F  
アプリ版トレーナーに例えるとタイトレ系列の熱血男やで

173 : 名無しのトレーナー ID : A 9 t l g J a K r

『こいつは逃げてるつもりなんですよ、ちなみに俺も逃げてるつもりですよ』

174 : 名無しのトレーナー ID : W5pjMUExO  
んなわけないやろ！ってツツコミ入れられてたけど、耳が聞こえないで気持ち良く大  
外を走ってるなら、他の馬の音とか聞こえてないかもしれないな……

175 : 名無しのトレーナー ID : w0WJSreFW  
その辺の逸話からの調整やろうな

176 : 名無しのトレーナー ID : B j g H 2 E i F G  
流石に作り込んでいらっしやる

177 : 名無しのトレーナー ID : 0 F l G P 6 8 z d  
実際はどうやったん？、流石に逃げの走りには見えなかったんやけど

178 : 名無しのトレーナー ID : T W Q P t k L l o  
んにゃ、本当にそうらしいよ

179 : 名無しのトレーナー ID : F o X Y F Z O s f

やっぱ有名ジョッキーはいろいろとおかしい

・ ・ ・

540 : 名無しのトレーナー ID : 3nEy t3Joz

このスレの更新早くないか？

541 : 名無しのトレーナー ID : hAL / SATPB

いうて『ナンキョクコウテイ』の時と動きは変わらんやろ

542 : 名無しのトレーナー ID : IQbW3lSFl

ペンギン……

543 : 名無しのトレーナー ID : pZ0QhT6jE

『ほう、死にたいようだなトレーナー』

544 : 名無しのトレーナー ID : f5Xgc6Dxo  
許して!

545 : 名無しのトレーナー ID : D+POhENve  
息子の話になつとるで

546 : 名無しのトレーナー ID : QDrFzKYlG  
いや息子のインパクトは異常だったから、むしろお父さんの方が地味に見える

547 : 名無しのトレーナー ID : aqLgv3vdo  
勝負服がペンギンとか予想してもシニール過ぎて吹いたは

548 : 名無しのトレーナー ID : aaeVlkgeh  
はい!、話を戻すぞ!

5 4 9 : 名無しのトレーナー ID : i 6 N 1 M 3 w Q u  
 すまん悪のり精神が働いた

5 5 0 : 名無しのトレーナー ID : w l G C F A l v h  
 許す

5 5 1 : 名無しのトレーナー ID : 9 c k l 8 G F o /  
 で、なんの話してたっけ？

5 5 2 : 名無しのトレーナー ID : f J L c J U B 2 T  
 自分で遡れ(キャラストーリーの話っす)

5 5 3 : 名無しのトレーナー ID : 4 K F B d w 4 Y W  
 ツンデレおつ、でも助かる

5 5 4 : 名無しのトレーナー ID : F v m f U z D g x  
 実際、予想外なキャラクターだったよな

555 : 名無しのトレーナー ID : 8 c p e H f J A 6

『ラジって呼んでください!』からの『はっ?、突然馴れ馴れしいんですけど、まいいけどさ』

556 : 名無しのトレーナー ID : T z 0 A V 2 j E j

二重人格かと思ったら『いつでも明るいうマ娘を演じれば相手に突然近づいても不審に思われないでしょ』だもんな……、どうしてああなつたんやろか?

557 : 名無しのトレーナー ID : D O 5 K j 6 S H /

レース中はダウナーだったらしいよ

558 : 名無しのトレーナー ID : C l M Q b V z s Q

会話ができる主戦騎手が便利すぎるから、あの人に聞いたイメージから構成されてるらしい

559 : 名無しのトレーナー ID : h H b a E b j 0 0



へー、そうなんか

560 : 名無しのトレーナー ID : t m r + o N h j H

あとタマモクロスと同じツツコミ梓なのは今後が忙しそうなやと思った

561 : 名無しのトレーナー ID : 4 t A g k T d h f

ツツコミが二人で足りるわけないんだよな……

562 : 名無しのトレーナー ID : 3 y v I V G 9 Q y

『コウテイ、助けて……』

563 : 名無しのトレーナー ID : Y L l w j A s 8 e

恥も外聞も捨てて息子に助けを求める父親の図

564 : 名無しのトレーナー ID : b 0 M c a / B / 0

オグリとクリークに挟まれた上で、チヨちゃんやエノにも捕まっていたから助けを求めの方が普通なんよ……

565：名無しのトレーナー ID：a r y J 2 K 3 T w  
それと地味に恋愛に強い

566：名無しのトレーナー ID：j k E G c 8 Y + r  
『ん？、今補聴器はずしてて聞こえないからもっと近づいてくれない？』

567：名無しのトレーナー ID：c x d x E C k L o  
『お、良い筋肉してるじゃん』

568：名無しのトレーナー ID：l q x A q B 7 3 b  
『はっ？、何言ってるのトレーナー、夜遅くまで私の走りを考察して、最適なコースを  
選べるトレーナーがいんの？、いないからあんたに声をかけたんじゃないの？』

569：名無しのトレーナー ID：G X L i 3 k J P m  
『ボデイトッチが多いから勘違いしそう……』

570 : 名無しのトレーナー ID : d7C8wb2KA  
 オタクにやさしい委員長

571 : 名無しのトレーナー ID : YNKk3SCJW

『どうしたのオグリちゃん？、お腹が空いた？、ん……、私も小腹が空いちやっただよね、明日の朝ごはん分のためにたくさん作っておきたくもなつたな』

572 : 名無しのトレーナー ID : njdkRn44D  
 ママ……

573 : 名無しのトレーナー ID : 3Eq0XMIir  
 独りっ子っていう描写があつてあれは異常

574 : 名無しのトレーナー ID : UnZ3N/ICz  
 ジャポ―ネは私の母になってくれたかもしれない女性だ

以降、自分たちのママを決める戦いが始まったのだった。

## 50000UA記念 掲示板回 ネタバレ注意

ウマ娘板 新規イベントについて ネタバレ注意

1 : 名無しのトレーナー ID : XD0pCD3Dv  
いろいろ言いたいことありそうだしスレ立て

2 : 名無しのトレーナー ID : 5nVnLEhdH  
サンキュー

3 : 名無しのトレーナー ID : pJMyNMMoJ  
ありがとう

4 : 名無しのトレーナー ID : iZfL3qPF5  
まあ、今回のイベは想定外ではあったよね

5：名無しのトレーナー ID：l3g g k u b 4 e

今までがレースとか育成関連のイベントだったから唐突にファン感謝祭イベントが出たからビックリしたは

6：名無しのトレーナー ID：S v J P m w H H s

まあ某社さんはこの辺のイベントに一日の長があるからねー

7：名無しのトレーナー ID：H 9 u 6 0 q 4 v l

レンタル方式で育成ウマ娘が貸し出されるのはありがたかったよねー

8：名無しのトレーナー ID：k H p g l g p s J

おかげでオグリのストーリーが完走できましたー！

9：名無しのトレーナー ID：X V V w s j k l B

因子として使えないのは難点だけど育成ウマ娘を増やせるのはありがたい

10：名無しのトレーナー ID：anKk6ib8V  
 グループを増やせば貸出しウマ娘も増やせるから良いべだったは

11：名無しのトレーナー ID：WKwg7KZbZ

『ウマドル最強決定戦』とかいう現役時代も何もない特殊イベだったから楽しかった

12：名無しのトレーナー ID：DRhePox14

不思議な組み合わせのグループがあつて好きだった記憶、カレンチャンハカワイイデス!!!

13：名無しのトレーナー ID：yOoPwbGoc

王道の『逃げ切りシスターズ』と三冠馬のグループの『プルーフ』とかカツコ良かったよね

14：名無しのトレーナー ID：mmyO1XJXY

個人的にはそれぞれにノルマがあるのが好きだった。

15：名無しのトレーナー ID：hYKlUbT00  
このチームしか選べない！、みたいなのじゃないのはありがたいよね、SSRサポカの配布も全体目標だったし、個人目標の報酬もピースで今までのレジエンドレースをしていけば実質的にキャラをゲットできたし

16：名無しのトレーナー ID：mYl1ldSTmT  
オグリ難民としては助かった

17：名無しのトレーナー ID：y6HpXa3bC  
これでスズカを解放できたはー

18：名無しのトレーナー ID：qnnkQreZ8  
こつちもブルボンいけた

19：名無しのトレーナー ID：CdyUablxC  
今回は全体的に良いベってことでもいいの？



20 : 名無しのトレーナー ID : oDVXgeUSF  
うむ、結構好きな内容だった

21 : 名無しのトレーナー ID : tWesIbVQJ  
個別ストーリーに、個別ライブと個別楽曲は気合いが入りすぎてるんだよな、これが  
神イベにならないわけがない

22 : 名無しのトレーナー ID : IExLmLb0x  
それじゃ、風呂入ってから『ツインKAWA I♡』のノルマがまだだからちよつと消  
えるね。

23 : 名無しのトレーナー ID : EDPkODQ9w  
は？、ふざけるな先にノルマを達成しろ

24 : 名無しのトレーナー ID : ULlKlbSR/  
過激ファン怖いなあ、戸締りしとこ

.....

257 : 名無しのトレーナー ID : 93GvAsR0H  
マヤノとカレンチャンの絡みってサポカ以外だと初だったりするのか

258 : 名無しのトレーナー ID : 8HLW/wzCC  
なんか似たような雰囲気のカラクターだから意外だよ

259 : 名無しのトレーナー ID : Qzt0Av4ty  
個人的にはシンボルドルフとミスターシービー、ナリタブライアンの異種格闘戦感が好きだった。

260 : 名無しのトレーナー ID : CsX4ZJ72/

マイペース二人とそれに振り回されてる感じだよね、あれは尊いものだった

261：名無しのトレーナー ID：01tgv9v5+

やっぱ、全体ストーリーで一番ゾクツと来たの一回戦の『プルーフ』と『茸毛三銃士』だな。

お互いの主要メンバーがベテラン同士の戦いが一番始めにあるんだから格好良すぎる

262：名無しのトレーナー ID：e/603g6BB

そのネタバレは大丈夫なん？

263：名無しのトレーナー ID：1XWhCQSQR

掲示板名を見る

264：名無しのトレーナー ID：rf9T8kiuK

落ち着いて掲示板を見直すんや

265 : 名無しのトレーナー ID : e / 603g6BB  
すまん

266 : 名無しのトレーナー ID : Tq4rClFYd  
許す

267 : 名無しのトレーナー ID : g0ADp / Vob  
敗者復活で茸毛三銃士が勝つのは王道だなつてなつたな、ただ逃げシスがシード枠なのは笑った

268 : 名無しのトレーナー ID : mcD6X + WRS  
主人公ファルコ改めてラスボスファルコ

269 : 名無しのトレーナー ID : lrw4 / x6AQ  
あとメジロ賛歌は冗談かと思つた

270 : 名無しのトレーナー ID : / u5uvJz8O

ツツコミ所が多すぎる……。

271 : 名無しのトレーナー ID : YeVHMWu Cp  
本気でやったカレン、マヤノ、ペアに対してネタに走ったメジロ家

272 : 名無しのトレーナー ID : KU1HJot66  
一応本気でやってたんだよな……。

273 : 名無しのトレーナー ID : SBpOqa uQM  
最後のライブでの王道展開も好き

274 : 名無しのトレーナー ID : DJKLpqtS +  
仲良しのお姉ちゃんが最後のライバルになった時のナンキョクコウテイは可愛かった

275 : 名無しのトレーナー ID : litTCkrRW  
それでも熱い展開だったな

276 : 名無しのトレーナー ID : 6 r T + V C F M T

最終的に全員でうまびよい伝説を踊るのホントに好き

277 : 名無しのトレーナー ID : g C v l T U 5 l s

それぞれのストーリーも良かったよね

278 : 名無しのトレーナー ID : y + T T N E C b U

マヤノはマーベラスとローレルの二人がコーチとかいう謎のメンバーだったな、そしてカレンチャンも混ざるとまさに混沌だった

279 : 名無しのトレーナー ID : y Q E l 2 s M t m

混沌?、カワイイの間違いだろ

280 : 名無しのトレーナー ID : V I X l R 7 w + t

まあ……、うんカワイイには違いないな

281：名無しのトレーナー ID：HQZ04OTT h  
 ルドルフとナリブの生徒会メンバーとそうじゃないシービーだったはずなのにいつの間にかルドルフが置いていかれてるの好きだった

282：名無しのトレーナー ID：4CvZMFcI h  
 最初はリアルな気不味さがあつたのにな

283：名無しのトレーナー ID：yB4LG75Db

不思議な関係と言えばイチームだけ性格面とかキャラクターとかが被ってない逃げシスが一番おかしいんだよな……

・  
 ・  
 ・

ウマ娘板 葦毛三銃士専用板

1：名無しのトレーナー ID：Iotsju25J

逃げシス板が盛り上がってたからついでに立てておいた、平成を愛するおっさんからウマ娘から始めた新人も好きに書き込んでね

2 : 名無しのトレーナー ID : CmK4+dka  
ありがたい、知らないおじさん

3 : 名無しのトレーナー ID : 9We9l3vJS  
わざわざイベントにしか登場しないやつに専用板を立てるのかよ

4 : 名無しのトレーナー ID : NTUSTJHCE  
公式の動画にイラスト付きのやつが上がったから本格的に推すんじゃないかな

5 : 名無しのトレーナー ID : 8gKYhE/pb  
少なくともうまよんに三銃士として登場してたからこの板は確実に残るでしょ

6 : 名無しのトレーナー ID : qosoiwfg5I  
ブルーフも夢女子たちがスレ立てしてたから、なんならメジロ板とかも立ってたから



今回のイベで個別にできると思うよ

7 : 名無しのトレーナー ID : f W p v E A c F a  
よし、話を戻そう

8 : 名無しのトレーナー ID : 5 R s R e w Q X W  
そこは本題に戻ろうとかじやないの？

9 : 名無しのトレーナー ID : F k D b t d W R a  
まあ、日本語難しいから許してあげて……

10 : 名無しのトレーナー ID : 7 W l 4 V l 8 g B  
個人的にはなんだけど今回のイベントでそれぞれのウマ娘の交友関係とかが詳しく  
なったからその辺を語りたい

11 : 名無しのトレーナー ID : + s L D e L D o Y  
うん、ええやん

12 : 名無しのトレーナー ID : X t p l g 2 m q p  
それじゃ、三人部屋の実態とかの話してもするか

13 : 名無しのトレーナー ID : e B l 6 A x 4 O f  
あれ、めっちゃ好き

14 : 名無しのトレーナー ID : U l I z 5 K p 6 J  
地方からやって来たオグリが馴染めるように性格の合うウマ娘を揃えていたらいつの間にか三人になってたつてやつか

15 : 名無しのトレーナー ID : v d 6 2 v u n d N  
それで全員茸毛なもの面白くて好き

16 : 名無しのトレーナー ID : W K T H w k s M O  
個人的にはラジとタマ、またはオグリとタマが一番良さそうだと思っただけ

17：名無しのトレーナー ID：k2ktVXpEr  
ラジちゃんとかタマはあんまりにもリアルで仲が良すぎるんだよね……

18：名無しのトレーナー ID：ke6wSTHtN  
あの二人のリアルの話がヤクザのトップと若旦那だからな、お互い何故かボスマ的な役割を担ってたからね、何もかもおかしい

19：名無しのトレーナー ID：+SVCRFfj2  
ちよつと二次元に戻ろつか

20：名無しのトレーナー ID：dZuBsMe2S  
単体エピソードが少ないけどあの世代の栗東でのエピソードの1/3くらいに加担してるからね……

21：名無しのトレーナー ID：so/M1b7QT  
あ、ごめん

22 : 名無しのトレーナー ID : 5 h c z m D m y U

うまよんにあった葦毛の部屋とかいうパロディーネタが本家であるのは笑った

23 : 名無しのトレーナー ID : 1 B o F E U H N X

広げやすさが段違いなんだよ

24 : 名無しのトレーナー ID : 3 e x Z l L p f I

ジャポ―ネは子孫関係、オグリは腹ペコ繋がり、タマは世話焼きだから選べるキャラクターが多すぎる

25 : 名無しのトレーナー ID : x L V g 0 r 3 f c

今回はルドルフの鍋だったよね

26 : 名無しのトレーナー ID : q b a h f t y + q

『前回の〜』とか言ってた中にジنگスカンを食べたって話があったけどそれは絞れなかった?

27 : 名無しのトレーナー ID : c g y C O C u a E  
 北海道は別格です

28 : 名無しのトレーナー ID : c k o + o O S 3 q  
 何頭いると思ってるの？

29 : 名無しのトレーナー ID : l C w d r N R V a  
 流石にキツいって考察班が嘆いてた

30 : 名無しのトレーナー ID : 3 p o O l 9 F H M  
 まあ無理だろ

31 : 名無しのトレーナー ID : P K k X y s W i +  
 育成ストリーで知ってたけど負けず嫌いが三人だから熱血系になって驚いた

32 : 名無しのトレーナー ID : L B + 3 K Q 7 t k  
 タマは少し違うかも？、でもウマ娘だとそんな感じになるよね

33 : 名無しのトレーナー ID : c92D2KfQs  
 乗り気じやなかったラジが一番全力で練習してるの解釈一致

34 : 名無しのトレーナー ID : dw/yFpMRB  
 『えー、それ疲れるんですけど』と言った練習をやり始めてからは文句一つ言わずに頑張ってた馬だから……

35 : 名無しのトレーナー ID : ezr65c+WH  
 終わったたら『えつ、もう終わり?』みたいなことを言っていたらしいし不思議な馬だったから納得の行動だよな

36 : 名無しのトレーナー ID : YpRg7GJf9  
 なんで馬と会話してるの……?、だから馬が不思議以前のお話だよな

37 : 名無しのトレーナー ID : TfzNVQQM2  
 ごめんね後輩たち、おじさんたちは二次元のこと良くわからないのよ

38 : 名無しのトレーナー ID : I o t s j u 2 5 J

まあ、そういう方は専用板に行ってくださいね

39 : 名無しのトレーナー ID : V K N L V R r L R

んじゃ話を戻して、オグリのモグモグモーシヨンの追加ありがとう！

40 : 名無しのトレーナー ID : B l g f Q m 9 g X

めっちゃモグモグしてるの可愛いよね

41 : 名無しのトレーナー ID : S e l c J p G s u

タマとラジの方向性の違いとかネタ要素もたくさんあったのは良作の証

42 : 名無しのトレーナー ID : / f k c C N B c U

『はっ！、関西風お好み焼きが美味しいのは認めますが本家は広島ですよ！』のキャラ崩壊よ

43 : 名無しのトレーナー ID : r r x K J U c 5 C

『なー、広島言うたらお好み焼きやなくてモダン焼きやろ！、お好み焼きの本家は大阪や!!、名前が証明しとる!!!』

44 : 名無しのトレーナー ID : / Q 7 7 Q b D 7 /

『どちらとも美味しいのと思うが……』でずれてるの可愛いよね

45 : 名無しのトレーナー ID : w J 7 6 l Z j 7 0

結局妥協したの面白いよね

46 : 名無しのトレーナー ID : 9 J 2 u F w i K q

争いの種を蒔くのは危ないけど、どちらかの勝利を見たかったな

47 : 名無しのトレーナー ID : a B v 2 Z X 4 y U

あれはタマの勝ちでしょ

48 : 名無しのトレーナー ID : D a Z Z f q J 7 M



『今日はこの辺で勘弁してあげます』の捨て台詞感が強いからしようがないけど負けではないぞ

49：名無しのトレーナー ID：F o r X 3 X S z 3

二人ともその辺は譲らないキャラクターだからね、ツツコミキャラの二人つていうこともあつて止まらないから、でも常識人だから長引いても無駄だと理解している、この結果は納得だな

50：名無しのトレーナー ID：g C N 3 d 6 D T 4

楽しかったはー！

ウマ娘板 ジャポーネ専6

567：名無しのシンデレラ ID：n L P r 6 E m 5 J

だから今回はヤバかったの！

568 : 名無しのシンデレラ ID : H m c b B A b k I

半ば確証が取れたのは大本のスレでも大騒ぎしてるからな

569 : 名無しのシンデレラ ID : L U a k K 3 r p C

なんか謎に盛り上がってるけどどしたん？

570 : 名無しのシンデレラ ID : y 2 l u 5 I p / y

今回の茸毛三銃士のストーリーでのコーチみたいなきャラクターが誰だったか思い出して

571 : 名無しのシンデレラ ID : s 3 2 N y J m V E

プルーフは理事長、ツインは同世代、メジロはマックイーンだったかな、他はなかったくない？

572 : 名無しのシンデレラ ID : Z J c 3 Z p M a C

たづなさん……

573 : 名無しのシンデレラ ID : k J j 5 N A H a e  
えっ?

574 : 名無しのシンデレラ ID : e N g k O 7 e R W  
三銃士はたづなさんが担当だったよ

575 : 名無しのシンデレラ ID : S H B b 2 V U O s  
それがなんなん?

576 : 名無しのシンデレラ ID : H b z Z W V e o J  
ん、推定たづなさんとウマ娘で血統が関係してる馬で一番イメージが強いのは何?、  
そういうこと

577 : 名無しのシンデレラ ID : O c t e s B b j x  
ザテトラークか……、てことは

578：名無しのシンデレラ ID：p i v s c X m u J  
たづなさんがトキノミノル説の信憑性が上がったらしいよ、ただトキノミノルはダービーのイメージが強いから誰一人ダービーに出走してる馬がいないのが不思議ではある

579：名無しのシンデレラ ID：5 Y 2 Q F 7 D Z U  
結局机上の空論だけだね

580：名無しのシンデレラ ID：t s 4 5 c S y h y  
んなことどうでもいいけど、今回のジャポーネの余所行き感ゼロな姿は正義

581：名無しのシンデレラ ID：5 j A w H u C m s  
お、話が分かりやすいのに戻った

582：名無しのシンデレラ ID：M V x M A b K R C  
わかる

583 : 名無しのシンデレラ ID : O3aFENFUB  
猫被りが消えるとキャラクターが変わる

584 : 名無しのシンデレラ ID : l y 2 a u S w f x  
ダスカみたいにキャラの高低差が大きくないから変化はそこまでないけど、中盤まではトレーナーにもデレないから変化がでかく見えるよな

585 : 名無しのシンデレラ ID : O m R O 8 + k p e  
『トレーナーさんは私のコントローラーだけど、レース以外の干渉は止めてね』とかのセリフが多いからね、自然と避けるトレーナーもいそう

586 : 名無しのシンデレラ ID : N r U Z S 4 Q a O  
まあ強くはあるからストーリー見なくても使用者は多いけどね

587 : 名無しのシンデレラ ID : D 2 G i t t U t T  
トゥルーエンドは最高に可愛いのに……

588：名無しのシンデレラ ID：HeO d d j J 9 l  
 勿体ないよね

589：名無しのシンデレラ ID：b t 6 X 9 G g E i

最後のセリフが『逃がさないよトレーナー』のせいで重バ系ステークスに参加させられることが多いのに冷静になると『私が引退してもトレーナーを続けてよね』が前に来てるからラオウなんだよね

590：名無しのシンデレラ ID：9 w N v K 3 g 8 f

勉強不足なトレーナーは『耳が聞こえない中に見つけた運命の人』だと思っだろうけど実際は『丁度良いコントローラー』なのが、また現実的だよ

591：名無しのシンデレラ ID：U K s 5 5 Y A J z

トレーナーを気に入ったから逆スカウトではあるんだけど……

592：名無しのシンデレラ ID：5 + W x / 3 4 q l

流石に声が聞こえないトレーナーとは組めないでしょ

593：名無しのシンデレラ ID：xq3Y5djyS  
 他は聞こえないから聞こえる方がおかしい定期

594：名無しのシンデレラ ID：8csia2cXc  
 それで有能トレーナーランキング上位のトレーナーを引き当てる幸運

595：名無しのシンデレラ ID：6FDONeWSx  
 史実が幸運な馬だから再現でしょ

596：名無しのシンデレラ ID：trg5GXzB4  
 解像度が高い馬だから再現の遣り甲斐があるんだよね

597：名無しのシンデレラ ID：yfm c85bgv

明るい性格は作り物、ダウンナーな性格は素の姿、集中すると周囲が見えなくなるのは  
 レース時の性格、命令に従順なのは気に入った存在への性格っていうのを頭に入れて育  
 成するとより好きになれるゾ

598：名無しのシンデレラ ID：aVc4TfluK

普通に助かるは

599：名無しのシンデレラ ID：Ra4yof397

トレーナーが優秀だと理解した瞬間にキャラクターが変わるよね、次のストーリーで明るさを消して登場するの本当に面白くて吹き出した覚えがある

600：名無しのシンデレラ ID：euyqJQJq6

女トレーナーだと凱旋門を越えないとデレないのにえらい違いだよな本当に

601：名無しのシンデレラ ID：lW/7FWC3z

人間の女性を信用してないから仕方ない

602：名無しのシンデレラ ID：AjlUWzFOP

この辺があくまでも利害関係の一致でトレーナーを決めてるよね



603 : 名無しのシンデレラ ID : 222xGO2SA  
 でもトレーナーは優秀なので問題ありません

604 : 名無しのシンデレラ ID : f9A0rPqQm  
 女トレーナーは止めてもいいのによ頑張るよね

605 : 名無しのシンデレラ ID : sxdA85YaH  
 あれでやっていいラインは見極めてるんだよな

606 : 名無しのシンデレラ ID : 13j33x4+F  
 小賢しい小娘だね！

607 : 名無しのシンデレラ ID : BqdOKM3aY  
 いまさらでしよ

608 : 名無しのシンデレラ ID : x+X33XH1C  
 その小娘に目を焼かれたトレーナーだから仕方ないのよ、手放すという思考すらない

でしようから

609 : 名無しのシンデレラ ID : rRUZ24gKr  
 自称二流ウマ娘を凱旋門で走らせたのはエグい

610 : 名無しのシンデレラ ID : tT2qq55rk  
 何だかんだで、いたずら好きなトレーナーみたいの描写とか、優秀な描写とかでモテ  
 そうなトレーナーランキング上位の目を焼いてるから、独占欲あってもおかしくないの  
 にトレーナーを止めるなって発言は本物の愛を感じる。

611 : 名無しのシンデレラ ID : dpm1UYLcK  
 いたずら好きな良いよね、それがお互いに対してだけなのもエモい

612 : 名無しのシンデレラ ID : jYhOQIN9d  
 一見固くて遊び心のなさそうな男がいたずら好きなのはギャップ萌えだし、それに影  
 響されて無邪気になっていくの好き……

613：名無しのシンデレラ ID：xTZ+XKsTB  
 結構クールなトレーナーだから驚いたけど現実の騎手の配慮って聞いて笑った

614：名無しのシンデレラ ID：NIJKy+GLr

『自己に投影するキャラクターに現実の人間が連想できるのはどうかと思いましたがね』だもんな、英断だよ熱血トレーナーだとウマ娘のジャポネにはあんまりだったからさ

615：名無しのシンデレラ ID：/mUAaP5jn  
 そうか？、どっちもいいと思うけど

616：名無しのシンデレラ ID：431L/SdBx  
 まあ、どっちでもええやん

これから起こる戦争は醜いので割愛……。

## 畜生道で輝く

### 二階級降格

意外と良くあるバッドエンド。

角から曲がつてきた車に轢かれて死亡。

私の人生はそんなテンプレによって締め括られた。

とはいえ、死ぬことは怖くなかった。

いや、怖くないというのは語弊があるだろう。

私は『死にたくはない』のだけれど、別に生に執着があるわけでもない。

要するに悟り系だの何だの言われているだけの普通の人間だ。

良くある若者のはずである。

夢もなければ、誇れるほどの勉学を積んでもない、趣味もなければ、特別快楽を求め  
るわけではない。

何かを求めることのない欲のない人間であつたはずだ。

ならば、何故だろうか

『ヒヒーン！』

仏陀よ！私は畜生道へ墮ちるほどの悪事を働いたのでしょいか。

それとも虫の一匹でも殺せば地獄行きと呼ばれる輪廻の輪の中では優しい行いなのだろうか。

いや、二つも下の道へ墮とされるのはあまりにも無慈悲である。

許せぬは六道を作りし神であるが、あいにくこの馬の身体は、そのような難しいことを思案するのにはいっとう向かないのだ。

今はただ乳を飲み草をはむ生活に怠惰なまま甘えているのが良いだろう。

それが幸せなのかと言われれば、とても幸せとも思えないが、今の私も生前と同じく、快樂を求めることはなく肥えさせられたならお肉になることも是としている。

そんなこともあつて幸せであることはなくとも、幸せではあるという矛盾を抱えている私であつたが、唯一樂しみと呼べるものがあつた。

「サチー、放牧だよー」

何を言っているかわからんだろう。

私も彼ら人間の言葉を理解することはできていないが、その音のリズムでなんとなく何を語っているかはわかるのである。

おそらく今のは

「うまー、散歩にいくぞー」

という意味合いの言葉であるだろう。

この散歩というのが、怠惰で食べることと寝ることしか許されぬ馬の身において、もつとも楽しい遊びであった。

生前は、人並みに遊ぶことをしていたものだが、それが趣味かと聞かれると途端に言葉に詰まる。

勉学に励むよりはましである程度のものだ。

そしてこの馬としての生活、比較となる勉学もなく、娯楽もないのなら、野山を駆け回る幼児のような行いすら、ただ暇を感じさせることのない素晴らしい快樂と言えらるろう。

この人間、おそらく牧場の人であろう、は、随分と都合の良い存在であった。

目の届かないような所へ走っても、怒鳴ることはなく、帰ってきたらナデナデと頭を撫でてくれる。

おまけに飯をくれるときたものだから頭が上がらない。

こんなに都合の良いことがあるとは、あとで揺り戻しがあるに違いないと身構えていれど、その時が訪れる気配はない。

それどころか、昼だけであつた散歩を夜にもして良いというのだ。

これはたまげたと嘶く。

どうやらここは畜生道ではなく、天道か極楽ではないかと、遊んでいるだけで飯を食える日々に喜んでいたので束の間、仕事が舞い込んできた。

「よし、ハミを着けるから大人しくしておくれ」

『バフツ』

どうやら私は、乗馬の馬だったのだろうか、首に手綱らしきものを装着させられてい

る。  
馬肉になることは当分先のことになるだろうと思つて、喜びに震える。

人間は私が不快に思つたのかと考え手綱の位置をずらしているが、さっきのが一番良かったもんだから、自分でちよつとずつずらしてその場所にしておいた。

そしたら人間もずれたのかと思つて直す、私かまたずらす、直す、ずらすといちごっこになった。

最終的にはずらした場所が一番良いと理解してくれたようで、そこにきつちりと固定してくれた。

その次の日は鞍を背に乘せてもらったり腹巻きを巻いてもらったりと、気分は乗馬のされる前の気分、今すぐにでも乗せてやろうと屈むと、まだ何か着けるといふことで立たされてしまった。

そんな幸せな日々は、まだ続く。

「乗るぞー、サチ」

「ありがたいなサチ、お前はいいサラブレッドだな……、G1だつて取れるかもしれないぞ……」

今度は立派な鞍にいつもの人間が乗つかつてきた。

始めは想像より軽いもんで、自分の世話をしている人間は小さな子供だったのかと驚いてしまったが、ぴよんと降りて頭を撫でる手はやはり大きくて、馬が車を引いていたという時代は本当だったのだと、密かに先人、否、先馬への敬意を抱いた。

そういうえは、友の話を忘れていた。

人間に愛想を振り撒くようなことも、同じ馬に愛想を振り撒くこともしなかったが、群れのはぐれ者のような奴から、随分と懐かれたもんで、寄ると頬をすりすりとされ、離れるととてと着いてくる。

正確な時がわからんもんだから、私がどれだけの年を生きてきたかを覚えてはおらんが、明らかに年下に対してこうも懐いてくるものだから友達などいなかったのだろう。



もつとも、人間として生きることの止めさせられ畜生に身を墮とした私は人の言葉はわからん、そんなでもつてなまじ人としての性質が抜けず仕舞いなもので、馬の言葉もわからん。

楽しそうにペチャクチャと会話している姿は可愛らしいが、何かわからん言葉をぶつけられるのはなんだか腹立たしくて何度か蹴つて追い払おうとしてみたものの、めげることなく私に語りかけてくるその姿には、健気なものを感じて、側にいることを許したというわけだ。

そんな友は今日もペチャクチャと言葉を話すが、眠ることを優先した私には、その騒音も聞こえることはなかった。

そんなある日のことだ。

ドシンと音を立てそうなかいかいトラックがブーンと音を立ててこちらへ来た。

人間たちがヘコヘコし合っているのをみて、人とは大変なものだと思つたものの、果して誰が出荷されるものかと、不安になってきた。

健気なあれは、若くないだろうから、馬肉にされることはないだろうが、万が一というものがある。

もし、あれの小屋に行くようなものなら、足止めはしてやろうと強く誓う。

だが

「今からトレ・センに行くんだぞ、立派なサラブレッドになって、元気で帰ってこい」  
ドナドナされたのは私だった。

良くわからん場所に良くわからんまんま連れてこられたもんだから、びっくり仰天して、空を仰ぐ。

馬の首で空を見ることの大変さを知るだけで終わった。

それからの日々が地獄が変わったのかと言われれば、そんなことはなかった。

ここでは私を肥えさせるといふ意思を感じないのである。

その代わりといつてはなんだが、坂道を延々と走らされたり、プールでの遊びが増えたりした。

運動量は増えたが、それは楽しいもんだし、不快に感じることはない。

ただ、ここまで来れば知識のない私でも流石に気が付く、どうやら私はサラブレッドのようだった。

後ろから追ってくる馬を躲す訓練だとか、並んで走る訓練だとか思っていたそれは、おそらく実践形式の練習だったのだろう。

となると、今度からの練習は本気で走った。

上の人間に言われる通りに、全力で何度も走ったもんだから、自分の限界がわからなくなかった。

毎日全力で走る上に、言葉も話せない奴が後ろから追いかけてくるなんて恐怖でしかないだろうに、私の隣で走っていた馬たちは、良く頑張っている。

すぐに追い越して、そのままゴールしたけれども……、彼らの健闘は素晴らしかったが、幼少期から意味もなく走り回っていたせいで、早く走る方法や疲れない走り方などは何となく知っている。

おそらく、私は早熟な馬として、数回走ったあとに食卓に出されることになるだろう。屠殺されるときは、痛くなければ良いと切に願いながら、今日の夜を終えたのだった。

## 不幸な馬

灰色

1985年、とある牧場に産まれた競走馬の卵

名馬ザテトラークの血をひく、と言えば聞こえは良いが、その父も母も、挙げ句の果てには、祖父も祖母も聞き覚えのないような馬しかいない。

ヘロド産馬を残したいという意思を持ったオーナーが、必死で集めた祖母であったのだが、その子供はろくに走らず、高まつていた競走馬への熱も冷めて、知り合いの牧場に預けた。

そんな不名誉な馬である。

曾祖父から譲り受けた葦毛は、その特徴的な斑模様ではなく、話題を呼ぶような真っ白なものでもなく、ただ少し黒い、灰色のものであった。

いや、灰色の毛並みが悪いというわけではない。

ただ葦毛は走らないという噂がまことしやかに囁かれているこの日本に置いて、中途半端な葦毛というのはハンデでしかなかった。

そんな運命の元産まれてきた彼であったが、その出産もまた酷かった。

特に暴れることもなく、安全に取り出されたと思いきや、突然母親から踏みつけられそうになり、職員に救出されてからも、母親からは嫌われ、冷たい目で見られることになった。

故に母の元を去って職員の手で直接育てられることになったのだが、その姿は無気力で、いつも虚空を見つめていて、食欲も薄く、職員がどこを触つても怒りを露にすることもないという、全てを諦めたような馬であった。

総数で見れば数えきれないほど多い競走馬に彼と同じような経験をした存在も多かっただろうが、牧場の職員たちは、その境遇を哀れんで、その仮の名前を

『サチ』

と名付けた。

どうかこの子の一生に幸があらんことを、そんな願いを込められたその馬は、職員の助けによってすくすくと成長した。

「サチー、放牧だよー！」

無気力に思えたサチであったが、どうやらそれは杞憂に終わったのかもしれない。

放牧を促すと、元気に走り回るのだ。

全力で走っては止まったり、ゆったりと歩いては跳ねたり、曲芸でもしているかのような動きは、愛らしくて、職員たちも、そのたてがみをふさふさと撫でる。

すると喜んでまた走り出す。

そんな繰り返しで、貧相な身体は成長していき、職員の見えないところまで走って行きそうになるような元氣澆刺な子に育った。

これでサチという明るい名前に相応しい子になったのか、それとも名前の加護のようなものなのか、サチは幸せに過ごしているように見えた。

だけれどもサチは馬の友達がいなかった。

一頭、父親から話しかけられることはあつて、随分と気にかけてくれている彼のことを気に入っているようだが、友達と呼べるような存在はいない。

なぜ友達ができないのかと思ひ、獣医に相談したのだが、その結果は残酷なものだった。

「聴覚障害です……」

サチは耳がほとんど聞こえていないというのだ。

人間より圧倒的に耳が良い馬という動物の単位なので、どれほどのものかとはわからないが、同族の言葉がほとんど聞き取れていないそうだ。

となるとなぜ人間の声は聞こえるのかと、当然の疑問が浮かぶが、それにも

「男性からの言葉では反応が鈍かったりしませんか？」  
心当たりがあった。

日常的に使う低音は、聞き取ることが難しいということらしい。

となると、馬の群れに馴染むことは難しくなるわけで、競走馬としての道も、通常よりもハンデを背負っているわけだ。

なんと、不幸なことだろうか。

サチに幸せはないというのだろうか、あまりにも無慈悲な運命へ怒りの声をあげる。  
だが

「代わりと言ってはなんですが、内臓機能が異常なほど強いようですね」

天は二物を与えずとも、釣り合いの取れる一物を与えることを許したようである。

競走馬として完成されたようなその身体機能は、他の馬とは一線を画すほどのものであり、その聴覚を除けば、素晴らしい名馬に育つ逸材であろう。

だが聴覚のハンデは小さくない。

それを乗り越えられるだけの才能があるか、それを見極めることができるほど、職員たちは馬に触れることを許されてこなかった。

すがったのは蜘蛛の糸か、それとも太いしめ縄か、一頭の馬の命運を、一つの牧場の存続を賭けた大勝負が始まろうとしていた。

「よし、ハミを着けるから大人しくしておくれ」

競走馬としての一歩目、馬具を着けることを嫌がるかどうかだ。

幸いにもサチは、首を撫でている間は、非常に大人しくしていてくれる。

ハミを着けるところまでは成功した。

『バブツ』

おっと、どうやら場所が悪かったようである。

少しずつ調整しながら、改めて着け直す。

すると

くいつ！

ハミがずれる

戻す

くいつ！

ずれる

戻す

くいつ！



ずれる

戻す

そんなことを繰り返すうちに、どうやら初めの場所が一番良かったようで、満足そうに首を振る姿は、人間臭くて、思わず笑みが溢れるのだった。

その後も、装具を着けていくことには抵抗のない様子で、人を乗せたらどうなるかと思いい、それを結構した今日。

「サチー、乗るぞー！」

できるだけ高い声で叫びながら、その背中に乗る。

今思えば、叫んでも驚いたりしないところからも、聴覚障害があることこの理解はできたのだろうか。

自分たちの学の無さに不甲斐なく思う一方、サチに奥さんができたら、どうなるだろうかと夢を膨らませる。

もつとも、競走馬は基本的にワンナイトラブ、一生を連れ添うお嫁さんはできないだろうが。

特に訓練もしていないのに、乗り手を気遣うような素振りを見せるサチに、底知れない才能を感じながら、ゆっくりと、地面に降りる。

「ありがとなサチ、お前はきつと一人前のサラブレッドに成れるさ、G1だつて取れるかもしれないぞ！」

サラブレッドとは、イギリスで改良された品種からの血脈のことなのだが、難しい言葉を使つても、馬はわからないだろうと思ひ、そのまま言葉をかける。

当然のように馬が話を聞いている前提で会話をしているつもりになっている。

これはいけないと、頬を叩いて正氣に戻るが、撫でてと身体をすりすりするその姿に絆され、結局は意味のない会話をするのであった。

そして彼の誕生から一年が過ぎる少し前、育成牧場に行くこととなつた。

同族と馴染めない彼にとつて、それから追いかけられたり、隣に居ることを強制されるのは恐ろしいことだと思う。

もし、馴染めないようなら、うちの牧場に帰つてきてくれると嬉しい。

大人しい子だから、乗馬用の馬としても活躍してくれるだろうし……

そんな思いに……、名残惜しいと思つているのはこっちかとなる。

「よろしく願ひします！」

「いえいえ、それでその子は……」

「あつ、それは……」

輸送に來た育成牧場の人間である彼は、今日、受け取り來た馬に想いを馳せる。聴覚障害という欠点を持つた馬。

あまり期待してはいないし、話を聞くに觀光客を乗せる乗馬用の馬になった方が良く  
と思えるが……

「はいつですよ」

灰色で小さい

その姿を捉えた一瞬では、そんな感想しか出てこない平凡な馬。  
しかし

「これが一歳未満の馬の馬体ですか……」

それは、普通の競走馬を基準とした場合。

その身体は明らかに大きく、落ち着いた姿で美しく、それでいながら足の筋肉は完璧な形で釣り合いが取れている。

はつきり言つて異常な馬であつた。

「遊ぶのが好きでして、良く散歩をしたりするんです、散歩した日は、良く食べてくれるもんだから、自分たちも嬉しくてですね」

早熟だつたとしても、早すぎる上に凄まじい勢いで成長し続けているというのだから

ら、他の馬がかわいそうになるほど完成されていた。

それでも

「聴覚障害はどの程度ですか」

馬自身が距離を測るのに重要な聴覚のハンデは、妨害や接触を回避することが求められる競馬において、大きなものであった。

「かなり高い声じゃないと音として認識できないみたいですよ……」

「聞こえはするんですか？」

「?、はい」

ひとまずは、大丈夫なようだ。

「それではこちらへ」

馬を輸送車に乗せる。

『サチ』

この馬は多くの幸運に恵まれている。

これの行先は、光ある栄光の道か、それとも暗雲立ち込める凡才の道か  
これからの気になる馬である。

大袈裟に手を振る牧場の人へ挨拶をして、目的地を目指すのであった。

## 我輩は馬である

我輩は馬である、名前はまだない。

否、名前がないと言うのは語弊がある。

人間たちは私のことを名前で呼んでいるのだろう。

『オグリキヤップ』だの『シンボリドルフ』のようなイカした名前を貰っていることがありえるかもしれないと期待しているが、私が馬と呼ばれていると勘違いしたこととから、短く二文字の名前なのだろう。

そんな自称名無しの権兵衛である私がいるのはおそらくトレーニングセンター？なのだろうか、良くわからない場所で立派な競走馬になるために日々研鑽を積んでいるわけである。

そうであった。

先日はさらりと流したが、私がこの場所にドナドナと送られてきた時の話でもしよう。

まあ、馬肉にされるのかと、想像よりも短い一生になったなと半ば諦めの境地にいた私は、短い時とはいえ育ててもらった恩のある人間たちの血肉となれるならば本望だと

考え、処刑台へ向かうマリー・アントワネットのように毅然とした態度でトラックに揺られていた。

「さあ、行くぞ」

人間からそんな声が聞こえた気がした。

ゆつたりと手綱を引かれ、その動きにも抵抗せずただ悠然と気高く、これから桜吹雪となるとは思えないような美しさを見せつけて。

死にたくないから生きている。

そんな輪廻から廻ってしまった先では、畜生に身を落としながらも、できれば長く生きてみたいと願っている。

例えそれが怠惰の末にたどり着いたしやうもない結論であつてもだ。

これは皮肉なものだと、なぜ人として生きることが許された贅沢な日々を浪費することしかできなかつたのかと、神とやらは、仏とやらは随分と悪意にまみれているではないか……。

彼の虎に変じた李徴子も同じように絶望したのであろう。

誰にも理解できぬと嘆いていた彼の心を理解することなど、己には難しいであろう。

彼の変じた虎は、傲慢と強欲の果てのもの、対して私の馬は無欲と自我の無さによるもの。

結局、李徴子も私もその心を理解されることのない孤独な存在と成り果てたわけだ。この世界に私一人

群れることで社会を作る人間が、本当の意味で一人きりというものも、珍しく先例のない事態に陥っているわけである。

ああ、これは滑稽だ。

舞台の演目になることだつてあるかもしれない。

誰にも知られぬ物語が誰かに知られるなど、それこそ滑稽な話なわけだが……。

「ほれ、とりあえずお前の……、人間と同じ言葉使いを欲しいだったか……、お前の部屋はここだぞ」

悲観に暮れていると目的地に到着したようである。

桜吹雪になる馬への待遇にしては、随分と普通の部屋に連れてこられたものだ。

もしかしたら、そうならずに済むのか、それとも競走馬の方々は豪邸に住んでいるのか。

妄想が膨らむのだが、あいにくそんなことを言つてられるほど、明るい状況でもないのだが。

「今日は疲れただろうからな、ゆっくり休んで、明日から走るぞ」

バイバイと手を振る人間、どうやらこれでお別れのようだ。

一思いにやってくれると嬉しい。

死を恐れはしないが、痛みというものは普遍的で恐ろしいものなのだ。

生前の私が生きたいと願っていたのは、命を落とす時に訪れるであろう痛みが恐ろしくて仕方なかったからである。

持病の頭痛で痛み鈍感ではあったが、それでも痛みを人一倍知っていると云える。

そのせいで、私は自分が自分に与える痛み以外が恐ろしくて、逆説的に、自分をつねたりすることが好きだった。

異常な性癖を暴露したところで状況は好転しない。

今ここから逃げ出したところで、私を匿ってくれる人間などいるわけがないのだから、通報されるのが関の山である。

恐ろしい、恐ろしいと眠れぬ夜を過ごしたあと、昨日と同じか、そうでないかは定かではないが、人間が現れた。

「よーし！新入り、飯だよー」

甲高い声、相変わらず意味を認識することはできないが、この明るい声。

これが桜吹雪に対する態度であろうか、いや断じて違うだろう。

だが、声と共に落とされたのは麦らしきものと、牧草が混ざった食料であった。



途端に私は、最後の晚餐という言葉を思い出した。

どんな悪人であっても、その最後には願いを叶えるために好きな食べ物を与えるという習慣があるらしいのだ。

となると大変である。

「食べていいんだよー？」

私はこれを食べてそのまま死ぬのであろうか、恐怖に震える私を見て、さらに甲高い声をあげる人間。

だが恐れるのは無知のやること。

死すら既知の範囲内である私にとって、その死に方すら既知であるなら本当に恐れることはないのだ。

ただ毅然と、美しく、最後に引き金を引く人間の一生に残り続けるような馬へとなってみせようではないか。

そんな悲壮な覚悟を決めていた私に人間は不思議なことを口にする。

「今から放牧だけど、あんまり芝を食べちゃダメだからね」

？

今散歩と言わなかったか？

まさか散歩までさせてもらえると、どうやら私が死ぬのはもう少し先になるよう

だ。

だが、冷静に考えてみると解体する時に、胃の中に草が入っているのでは、やりづら  
いからではないのか。

そんな邪推も生まれる。

人と言うものは、一度思い込んでしまうとなかなかそれを止められない生き物であ  
り、今世が馬である私にとつても同様のことが言えるのである。

覚悟を決めては、それを崩され、おっかなびつくり向かった先には、先日まで私の住  
みかであった草原に良く似た風景であった。

違うところは、馬の数であろう。

二桁に届かない馬しかいなかったあの場所と違い、この場所では、黒、白、茶色と様々  
な馬がいる。

これだけの馬がいる場所が屠殺の場所なはずがないと、改めて確信を得た私は、その  
まま草原を走り回るのだった。

「休んだら本格的な調教だからな」

よくわからん言葉をかけられながら、連れられたこの先は、円形のコースであった。

ああなるほど、私は馬術かなにかの馬であったかと、初日にして気付けた私の脳は素  
晴らしいと言えるが、それはそれとして、何をするのだろうか。

故郷の人間たちのように背に乘せての訓練となるのだろうか、装具を着けられ待機する私を、引っ張っていく人間、良くわからないから着いていく。

引っ張る

着いていく

引っ張る

着いていく

引っ張る

これはなんなのだろうか？

訓練というよりも見張り着きの散歩のようなこれは、果たして訓練と呼べるのだろうか……。

やがて、驚いたように手綱から手を離すと、装具に足を掛けているようで、ああ乗ろうとしているのかと思ひ、少し体勢をずらす。

すると乗ったまま手綱を緩められる。

何がしたいのかと見つめると、お尻をポンポンと叩かれる。

前に進めと言ふことかと、のんびり歩き始めたが、どうやら違ったようでさらにポンポンと叩かれる。

痛くはないが、鬱陶しくはあるので、何ですかと顔を向けると、ポンポンは加速する。

ああ、歩くのではなく走れと、そんな指令であつたのかと、一を聞いて三くらいを知つた私は、トコトコという擬音が似合う歩きから、しゅーんという擬音が似合う走りへと移行するべく足を速める。

先ほどまで辿つていた道を完璧になぞりながら、走り続ける。鞭が飛んでくるかと思つたが、そんなことはなくただ延々と同じ速さで走り続ける。

満足したのだろうか、手綱をくいと引く感触にゆつくりと足を止める。すぐに止まると身体に悪いというから、少し歩いてはいるが、するとまた手綱をくいとされたので、今度は停止する。

上にいる人間が何やら独り言を呟いているが、かわいそうだからすりすりして癒してやろうと思ひ、頭を擦り付けようとしたものの、冷静になれば馬上の人間にしてやれることなんてないなと諦めた。

その後、この身体を診てくれる人？、に身体を弄くり回されて、夕飯を食べて、夜にわしやわしやと身体を頭を撫でられて、その日は終わったのだつた。

友達がいけないこと以外は順調な滑り出しであると言えるのではないか。そんな虚しいことを思いながら、床に着く。

まあ、床に身体を寝そべて眠ることは、生前の「馬は横になると死ぬ」という噂の

せいで、恐ろしくてできないのだが、足に体重を乗せる時に、一本だけ力を抜いているので、休むことはできているのだが。

意識も薄れ始めた。

今日のお話はここまでにしよう。

それでは、また機会があれば

Z Z Z Z Z Z Z Z Z

## 幸福な馬

1986年

初の牝馬三冠である『メジロラモーヌ』に、マイル最強候補の一角である『ニッポータイオー』、大波乱を巻き起こした有馬記念の『メジロデュレン』。記憶に残るレースも多かった年。

とある小さな牧場のお話だ。

新入りが来る。

特段不思議なことでもないのに、繰り返し全体に周知させるような事態であるとは、新入りは余程荒々しい馬なのかと考えるが、どんな馬であろうと嚴重注意の連絡を必要とすることはなかった。

となると、先例のない何かを持っている馬であるのかと戦々恐々しているこの場所は、繰り返すが小さな育成牧場である。

そして、その場所へ運ばれて来たのは……………。

「よし、行くぞ」

平凡な馬であつた。

特別大きく、下手な真似をしたら踏み潰されるような圧倒的な力を持つわけではなく、特別小さく、下手に触れたら壊れてしまうような貧弱な身体を持つわけでもなく

少し灰色で、走らないと言われている葦毛ではあるが、それでも珍しいと全体周知するほどのものではない。

だが

そこには気品があつた。

間違えなく貴い生まれの馬だと確信させるような気高い何かがあつた。

彼の皇帝『シンボリルドルフ』が暴君でライオンと例えられているならば、ここにいる灰色は儂くも気高い白鳥と言つたところだろうか。

醜いアヒルの子供が、灰色の小鳥が美しく育つたように、この馬は何かを成し遂げてくるとそう思わせる『何か』がある。

悠然と歩むその姿を見た職員たちの心は一つになった。

この馬を勝利へ導いて見せると……

この辺りは後の世に作られた創作であり、実際は耳の悪い馬とやらの世話のための情報集めに没頭していたのだが。

さて、手綱を引く厩務員さんは、あまりの抵抗のなさに、何か気分が悪いのではないかと思ひ始めている。

けれども、この子の実家の牧場の職員さんから話を聞くに、大抵の指示に大人しく従ってくれるとのことなので、野生でいたら簡単に喰われるんだろうなと思う程度には、大人しいこの姿にもさほど違和感を覚えずに済んだのだが

『人懐っこい子なんですよ』

そんな言葉を聞いた後であるため、こちらへ何のアプローチもしてこない姿は、知らない相手には弱い部分を見せない野生の獣のようでもある。

相反する二つの側面を持つその姿は、馬という生き物を育て導くことの難しさを改めて感じさせるのであった。

「ほれ、ここがお前の部屋だぞ」

さあ、目的地へたどり着いたが、部屋に入ってくれなかったら……、大人しく部屋に入った。

ここまで来ると不気味である。

もしかしてこの馬はアンドロイドか何かではないかと勘繰ってもみるが、筋肉の動きに違和感はないので、ロボットでもないようだった。



つと、真剣にバカなことを考える程度には、この馬に魅了されていたようである。

「とりあえず今日は、ゆつくり休んでくれ」

「コミユニケーションに行き詰まっている中で思い出されるのは……。」

『この子は賢いので、馬ではなく人に話しかけるようにしていたけると嬉しいです。あとは、触れてあげると喜ぶので、頭を撫でてあげて欲しいですね……。つて、すみません余計なことを』

そんな言葉だ。

まさか今までの塩対応がそんなことで変わるわけ、いやそもそも馬と人間的なコミュニケーションをしようとしていることがおかしいはずなのだが、秋の紅葉のように真っ赤に温まった頭は、正常な判断をしてくれない。

「えーと！、なあ兄弟、お前の好きな食べ物ってなんだ!？」

錯乱して日本語翻訳した後のアメリカ人のような口調になっているが、頭を撫でながら、世間話を続ける。

「最近彼女と喧嘩してさ、仲直りの方法を探してるんだが、なんか良い方法はねーかな……」

その馬は不思議と聞き上手で、彼の言葉を聞いて頭を撫でられ続けても、気持ち良さ

そうに目を細めるだけで、落ち着いた様子だった。

正氣に戻った後も、この奇妙な会話は続き、今日はゆつくりと休んで欲しいと思つていた心は、彼にもつと話を聞いて欲しいという心に代わつていた。

「うちの近くのうどん屋が美味くてな、今度一緒に……、は無理だな」

どれ程の時間が経つただろうか、辺りはボンヤリとした月明かりに照らされている。

まぶたが閉じそうになりながらも、会話を試みようとしている自分を哀れに思つたの  
だろう。

『バフウ』

優しく鼻を鳴らした後、その馬は、いやサチは優しく身体を擦り付ける。

そして彼が眠つた後は、誰かを呼ぶように一度大きく嘯き、そのまま同じように眠りについたのであった。

もちろん、仕事をすっぽかした彼は、職員全員から説教されたのだが、それでも充実した一日であつたと胸を張れるような一日になつただろう。

翌日

不思議な魔力にやられた彼はしばらく出禁となり、低い声を聞き取りにくい彼の世話を適任である女性の一人に世話を任せることになつた。

「よーし！、新入り、ご飯だよー！」

明るく甲高い声をした彼女の声ならば反応するだろうと思っていたのだが、そこにいるのは虚空を見つめる馬がいるだけだ。

「食べて良いんだよー？」

聞こえていないのだろうか？とポンポンと頭を叩いて、エサ箱にもポンポンと手を置く。

すると気付いたのだろうか、エサに首を伸ばして、むしやむしやと草を食む。

今までは本当に気付いていなかったのかと、間の抜けた様子は堂々とした昨日の態度とは違って愛らしく思えてくる。

そんな愛らしい馬の頭を撫で回すと、嬉しそうに目を細めるのと同時に、どこか空を見上げるように虚しい表情を見せる。

哀愁のある姿は、故郷の家族を思っているのか、はたまた、ただ食事が口に合わなかっただけなのか。

おっと

「これから放牧だけど、あんまり芝を食べちゃダメだからね」

すると、悲しみを秘めた瞳は光が灯った気がした。

「ん、放牧……、んにゃ、散歩が好きなのかな？」

嬉しそうに鼻を鳴らす姿は、幸せそうでほとんど聞こえない耳で放牧という言葉を感じ

えたという事実が思われて、悲しいような、微笑ましいような複雑な心境をもたらす。

「よし……、行くよー！」

牧場にたどり着くいて、手綱を外すと、跳ねるように飛び出す。

走って、止まって、跳ねて、叫んで

幸福を冠する名前と同じように、ただ幸せを全身で表現する。

その姿は灰色の肌と違ってとても目を惹いた。

「綺麗だったよ」

こちらに帰ってきた彼に思わずそう声をかけたのは、当然のことだったと思う。

「休んだら、本格的な調教だからな」

たくさん遊んで疲れたあとは、お昼寝、なんかで終わるほど競走馬の一日は甘くない。

放牧のあとは、ウォーキングマシンなんかで、ウォーミングアップをしてから調教が始まる。

とはいってもこの時期は騎乗をせずに、ハミから二本のレールを出して後ろから馬を動かすドライビングで、手綱を使った動きを覚えさせるのである。

装具を着けて、前に歩かせる。

少し方向を変えるように動かしてみると面白いほど思い通りに動いてくれる。

こいつは凄いとジグザグに歩かせてみると、これまた上手に動く。

馬術にでも向いているなど、思いつつも競走馬を熱望されている子であるため、そうもいかなないと手綱を取り直す。

すると

『バフウ』

こちらを向いて、何かを語りかけるように鼻を鳴らす。

まさか

「走りたいのか？」

『ブウフ』

縦に首を振る。

偶然にはできすぎた反応、恐る恐る手綱を手放すが、走る様子はない。

やはり杞憂だったのかと、再度手綱を取ろうとすると、少しだけ身体を傾ける。

「はっ……っ？」

冷や水を浴びせられた気分だ。

この馬は今何をした……。

自分に走ることを促し、そして

「乗れってのかよ」

その背に乗ることを、乗せることを望んでいる。

馬術向き？

冗談じゃない

こいつの魂は競走馬だ。

俺が乗って手綱を緩めると再度こちらを見る。

彼なりの何かがあるのだろうか、良く見るとその視線は手綱を握る手に向いている。

思い付くのは……………

『触れてあげて欲しいっす先輩』

そんな後輩の言葉

その後ろ足を叩く

ゆっくりと前進が始まる。

更に速く叩く

加速が始まる。

その加速は止まらない。

今まで歩み続けたその道をジグザグに、だが加速は止まらない。カーブに差し掛かっても減速はしない。

膨れることも、レーンの内をはみ出ることもない。

永遠の加速。

このままだと光を超えて地球を飛び越えて

こえて

超えて

こえて

圧倒的な浮遊感

この世界から消えてしまうような感覚

とんとんとん

無意識に手綱を引いた。

どうしてだろう

このまま消えても良かったはずなのに

怖い

怖い

怖い？

そんな理由で手綱を引いていたのか……。

無意識に身体を抱きしめる。

それでも震えは止まらない。



この馬は危険だ。

あの浮遊感は消えたはずなのに。

自分がここにいることを異常だと思っている。

崩れ落ちるように鞍から降りる。

心配しているのだろうか、身体を擦り付けるその愛らしいはずの姿は恐怖の象徴にしか思えない。

この日、一人の厩務員がその仕事を辞めた。

また、全力で数分間走り続けたとある馬には、一切の筋肉の疲労も見えなかったと聞くが、それは彼の今後の人生には関わりのないことである。

## 走れサチ

「よしー、いくぞジャポナー！」

私は激怒した。必ず、かの邪智暴虐なジョッキーを除かねばならぬと決意した。

私には競馬がわからぬ。私は馬である。今まで草を食み、厩務員と遊んで暮らしてきた。しかし、鞭による痛みには馬一倍敏感であった。

というのは建前である。

私として出鱈目に加速が遅い馬にわざわざ騎乗してくれるような方や名乗り出てくる馬主がいたことは感謝の極みである。

それはそれとして彼はなぜ鞭というものをもっていないのだろうか。

確かに鞭は恐ろしい、私も痛みは大嫌いなものだから、トントンと叩く形で合図をしてくれるのは嬉しいのだが……。

おっと、そうであった、私にも馬主と騎手らしき者ができたのだ。

先日、それは桜舞う春の日であった。

ゲート訓練に、体力向上の基礎訓練、小さくとも設備は十二分なこの場所を気に入っ

ていた私。

唐突にパリツと決めたいつもの厩務員に久しく車に乗せられて出掛けた先、ああついにこの時が来たのかと恐れているが……。

まあ、何度目の経験かわからないがいつものように屠殺場には見えない。

ああ、死なずに済んだと思うと同時に、いい加減にこの天井が起こらないような確固たる心を持つ必要があると認識した。

そもそも、私を連れていく時にえらくカツチリとした服装をしていた時点で気付くことができたはずだ。

馬の耳に念仏と言うが、瞳も節穴であったようである。

あんまりな脳みそは人間であった名残を見せていないものではつきり言つて馬に心までも侵食され始めているようである。

絶望的な現実には瀕死となった彼、いつものように手綱に引かれて歩んだ先は裁判所のような円形の椅子に囲まれた場所であった。

私がか罪を犯したのか……、なんて思うほどバカではないぞ！

言つてしまえば『セリ』と呼ばれるものだろう。

私にはどれ程の値打ちがつくのか少し興味がある……。

始まったばかりのバナナの叩き売りのようなシンと静まり返った会場は、自分の値打

ちはその程度だと嗤われているようで居心地が悪くなる。

馬主になるような大金持ちにとって競走馬など所詮、ただのステータスか、肉にされることに哀れみこそ覚えるものの、救う価値はないおもちゃか……。

盛り上がったのかさうでないのかも良くわからず、ただ一頭の馬は買われたのか、桜吹雪となるのかもわからず、延々と一点を見つめるだけであった。

全てが終わり牧場に帰る前、初老？くらいの人間が自分を訪ねてきた。

「えっと、よろしく頼むよ『ラ・ジャポネ』、僕の最初の競走馬くん……？」

静かに言葉らしきものを紡ぐ姿はどこか寂しそうで、身体を擦り付ける。

「おっと、人懐っこい子なんですネ……」

「あ……、そのどちらかと言えば撫でてくれた人へのお礼としての側面が強くて……、自分から行くのは珍しいですね」

「くすつ……、そうですね、これはもしかして運命というものなんですかね」

何か良くわからないことを話している二人から手綱をこちらから引いて、気を引いてみる。

「おっと、すみません」

「いえいえ、こちらこそ、呼び止めてしまって」

ん、どうやら終わったらしい。

待ちぼうけをするのも悪くないが、もうすぐでデビューするであろうこの競走馬人生。

少しでも身体を動かして、身体を仕上げておきたいのである。

「おいおいサチ、あの人はお前の馬主になる人なんだぞ、ご機嫌を損ねたらダメだから」

『馬主』

人の言葉はリズムで覚えてきた私にとって始めて理解できた人間の言葉は、凶らずもこの馬生を生きる上で最も大切な言葉だった。

ならさつきまで私が身体を擦り付けていたのは、かなり失礼にあたるのではないかな……、途端に恐ろしくなったものの、頭を撫で撫でとしてくれたものだから、気に入ってくれたと思うのも良いかもしれない。

ポジティブにならなくては、ビクビクと怯える姿ばかり見せていては、同族から侮られるに違いない。

怯えるのではなく、俺に着いてこいと人を引っ張れるような馬になる必要があるのかもしれない。

その後、たまに来て頭を撫でて帰っていく謎多き馬主さん、気に入られたのは本当のこのように、あの時のような黒いカッチリとした服ではなく、白シャツにジーパン

らしきものを着ている様子、いつもの甲高い娘ちゃんの反応からして、ファッションセンスのないイケメンオジらしい。

イケオジが馬主になってくれるなんて、ドラマチックな展開を期待するしかない。

おっと、謎の馬主さんの話も良いが、もっと面白いのが私の上にいるジョッキーさんである。

「今日はどう走りたいんだ？」

『大外』

「了解だ！」

いるだけで気温が上がるような気分になる熱々の男である。

スポーツマンは皆こんな感じという偏見を持っていた私の期待に見事に当てはまっている彼、乗せていて楽しいと思えるような人が上にいてくれることに感動の涙が出そうだ。

さらに言えば、この人は私の言葉を何となく理解しているらしく、一方的ながら、会話をすることもできるのだ。

そのお陰か、好きなように走っても途中から膨らむこともなく、コースの内側に入り込むこともなくなったのだが、はあ、本職の人はずいぶんと凄いなと、馬と話すことができなければジョッキーは成り立たないのかと驚愕しつつ、質問した。

結果、馬の声が聞こえたのは始めてのことだったらしく、実際はどうかかわからないとのこと。

ただ明らかに独り言でない会話らしきものを馬としてしている人もいるらしく、ああ、彼らの世界とは魔境だなと思ひ知らされた。

まあ、そんなこともあつて、走るのが楽しくなってきた今日この頃、そして遂にその時が訪れた。

「いつもみたいに行くぜー」

『あいよ』

新馬戦だ

三歳馬たちが集まる競走馬最初の門、ここを越えることができなければ、デビューすることすら許されない戦い。

言つてしまえば最も重要なレースの1つ、敗北は許されない。

ならば勝てば良いだけだ。

ゲートに入るは若き獅子たち

そこにいたのは走らぬと嗤われる葦毛ではなく

ただ一頭の獣である。

さあ、ゲートが開く

勝利の栄光か

敗北の苦渋か

そこにあるのは二つに一つ

けれど阻むは数多のライバル

歩みを止めぬ者にだけ勝利は訪れる



さあ、新馬戦の始まりだ

## 運命の馬

『馬主にでもなつてみたらどうだい?』

妻に先立たれ、娘も自分で家庭を持った寂しい老人にそんな話を持ちかけたのは、自分の古い友人であつた。

特に趣味もなかった私は、日々を過ごすだけなら定年前に集めた貯金を切り崩す必要もなく、年金生活で生きていけたものだから、その貯金を恵まれない人に投資でもしようかと考えていた。

遺産として残すのも悪くないが、娘もその夫もしつかりした子たちである。老人の節介などいらぬから好きなようにお金は使つてと、いやむしろ使いなさいとはつきりと口にしてくれた。

それじゃあ、やはり寄付をするかと考えていた最中、久しく友人が訪ねに来てくれた。寂しい老人にとって家を賑やかにしてくれる友人というものは、何者にも替えがたい存在である。

そんな友人にお金の使い方聞いた時のことだ。まるで同好の友を見つけたと言わんばかりに目を輝かせて、前述の言葉を口にした。

その時の私は馬主というものを良く知らず、成金どもの道楽程度に考えていたものだから、ああ、私は馬というものにも競馬というものにも興味はないと言つてやった。

するとそいつは、最初は皆そういうもんだと、やってみると楽しいもんだと、まるで宗教の勧誘のようなことを話す。

ああ、そこまで言うなら行つてやろうと春のセリとかいう馬を買う場所へ足を運んだ。

友人が話すに、育成牧場とやらで半年鍛えた馬で馬主がない馬を買うトレーニングセールと呼ばれるものだそうで、実践さながらの馬の調教でタイムを見てから買うことができるらしい。

そんなことを言われても何もわからないが、友人としては馬を見極めるのに実際の数字が見れるからやり易いのだと。

さあ、それを見ようとコースへ向かうと、随分と短い距離を走るようで、コースはほとんど使われないようだった。

さあ、一齐にスタートした馬たちはあつという間にゴールへ走り去つた。けれども一頭、灰色の馬が目に見えて遅れて走つて来たのが見える。

ああ、この子はもうダメだなと諦観の気持ちで見たとその馬は、決して諦めてはいなかった。

ただ、最初から一生懸命に走るものだど、逆に感心をさせられたのだった。

その後、実際に馬を買うことになったわけだが、ポンポンと手が上がる中、あの遅れた馬の出番となると、皆しんと静まり返って言葉を手を下ろす。

四百万という大金、されど軽く一千万以上の値が着く競走馬としてはあんまりな値段。

やはりと言ってはなんだが、その馬を買う声が挙がることはなかった。すると

目があった。

いや、私の勘違いかもしれないが、それでも確かに目があった気がしたのだ。

私に買って欲しいのかと、こちらから目をあわせると、頷くように頭を動かす。すると脳裏にはあの時の一生懸命な走りが思い出されるのだ。

ドラマチックな言葉になるけれども私はこの出会いを運命だと思った。

どんな種族でも、若い者が必死で努力しているのなら、それに応えてやるのが老人の役目。

さつと、手を上げる。

最低額で買うのも気が引けるので、少しだけ値を上げて五百万で勝負をする。

いや、勝負ではなく一人だけの落札なのだ。

案の定、他に手の上がらなかつたこともあり、ポンと落札できた。

他の馬の紹介もほどほどに、自分が買った馬に会いに行く。

すると若い厩務員が嬉しそうに頭を撫でている様子が見える。

ああ、あなたがこの子を買ってくれたのかとその嬉しそうな雰囲気のままに自分を手を伸ばす。

その手を取ってブンブンと動かすと、さらに嬉しそうに握り返してくれた。

こんなに良い人に育てられているのなら、この馬も良い子に違いないと思い再度目を合わせて

「よろしく頼むよ」

そんな言葉をかける。

そう言えば仮の名前しかついていなかったようなと思い、その場で名前を考えることにした。

うむ、何から連想すべきかと、灰色の身体からシンデレラにするべきか、それともこの立派な体格から力士の名前でもつけようか。

迷っているうちに咄嗟に浮かんだのは、妻の生前、美術館で見たあの作品。けれど名前にするには少し語呂が悪い、さらに言えばあれば赤である。

ならば

「ラ・ジャポーンネ、僕の最初の競走馬くん？」

うむ、老人のセンスにしてはなかなか良い線ではないだろうか。

すると彼は私の胸に頭を擦り付ける。

まるで撫でてくれと言っているようで、随分人懐っこい子なんですと聞くと、自分からすり寄ってくるのは珍しいとのこと、ああ、やはりこの出会いは運命であったかと幸せな心地になる。

しばらく話していると、厩務員くんの服の裾をくいつと引いているようで、ああ退屈なのだなど引き留めたことを謝罪しながら、今日はその場を離れた。

「ほれ、ジャポーンネ」

最近では彼に会う日を特別な日として、牧場へ足を運んでいる。

願わくば彼が、日の本の名を冠した彼が長生きしてくれることを強く願う今日この頃であった。

「はは、できれば知り合いにお願いしたくてね、どうか引き受けてくれないだろうか？」

親父の古い友人だという人からそんな依頼を受けたのは、俺がこの仕事を辞めようと思っていた時だった。

血統もそこそこで、才能も確かにあったはずの馬を預かったのに、ろくな重賞も取れずに引退させてしまつて、それが何度も続いて、ジヨツキーなんて辞めちまうかと嘆いていた。

まあそんな時だったもんだから、その人の申し出に素直に了承するわけにもいかなかつたんだよ。

もともと今の仕事を辞めても親父の牧場を継げば良いわけだからな。

それでも顔を見るだけつてその人は畳み掛けるように言つたわけさ。

そこまで言われたんじゃあ、しょうがねえとその馬を見に行つた。

まあなんて言うのかね……。

こんなおっさんが言うのは気持ちが悪いと思うんだけど……。

運命つて奴を見たんだよ。

そいつは出鱈目に立派な身体をしているわけでも、とんでもない血統をしてるわけでもなかつた。

でもよ

『ん？、誰？』

喋る馬つてのは運命を感じるのには充分だろ？

まあそれでな、喋る馬ことジャポーネなんだが、こいつがまた賢いんだよ。

俺の言葉の意味は良く理解できてないんだが、一度教えたことは大抵のことができてな、この前にはナポレオンのポーズをしようなんてバカなことにも付き合ってくれた。

その後、落馬しそうになって格好付かなかったけどな。

ああ、そんなことーどうでもよかったな。

こいつの面白い所は、賢いからでも、喋れるからでもねえんだ。

『くくー』

止まらねえ所なんだ。

加速して、加速して、加速し続けて

明らかに速度が限界を超えたと思っても加速が緩むことはない。

このままだと壊れてちまうんじゃないのかってレベルで加速し続けてんのに、獣医の人に見てもらったら疲れ一つ見られないときたらもうとんでもない。



でもこいつはバカなんだよ。

加速してその先をまるで見てない。

柵にぶつかるとか、他の馬目の前にいるとか、そんなことを一切考えてない。

目指すのはスピードの限界。

まるで人間のアスリートじゃねーかってな。

ふざけた身体とふざけた頭、ついでに言葉も喋れる。

そんな化け物に乗せてもらったならどうしても夢を見たくなる。

こいつと夢を見たくなる。

新馬戦は2000 m

こいつの真価を發揮するにはちよいと短いが……。

「いつもみたいに行くぜ！」

『あこよ』

こいつをこの国に見せつけるのには充分だ。

さあ、おつ始めようか新馬戦

## 新馬戦

「そんじや相棒、二回でダツシユだ」

『ポンポンね、おっけー』

初めて競馬場のコースを走るレース、いわゆる新馬戦というものであろうこの戦いはおそらく決して負けてはいけない。

『ねえ』

「なんだ？」

『ん、本当に止まらなくていいの？』

「ああ、そのスタミナと加速が相棒の持ち味であつて戦える唯一の武器なんだよ」  
『良くわかんないけど、わかつた』

シン

虫の羽音一つもしない静寂

新馬戦って言うくらいだから、みんなうるさい奴ばっかりかと思ってた。

大人しい馬は人気らしいから、私の人気は高いものかと思っただけど、この感じだと大したことないのかも……。

でも

『この方が集中できるね!』

最高の環境で合図を待つ。

今の私はたぶん最強だ!

ありえない喧騒……

いやまあ、新馬戦なんてこんなもただけだな。

観客の叫びにゲートを拒む馬の嘶き

「それに引き換え、お前は良いやつだな」

落ち着き払ったその姿のまま、自分の合図を待つ姿には、たいして良い血統でもないのに八頭中5番に推されたのも納得だ。

でも……

「ちよつと物足りねえよな」

血統主義は絶対の理に違いないし、時代遅れな血統の馬が走るなんて思われないう。う。

実際、今から共に走るのは天皇賞（春）を制した『タイテエム』の血を引くもの、三強時代を作り上げ、ミスターシービーが記憶に新しい『トウシヨウボーイ』の子どももま

でいる。

総じて長距離のG1を勝利してきた実績のある馬たちの血を引くものたち。

たいしてこつちは辛うじて『トキノミノル』の名が挙がるものの、それ以降の産馬で日本で活躍した馬がない血統、おまけに長距離は未知数ときてる。

だから

「ひっくり返してやるぞ」

幸い外枠にいることもあつて確実に邪魔されずに加速することはできる。

ここを俺たちの色に染めちまおうぜ……

さあ……

とん

一瞬の静寂

バン！

ゲートが開いた！

トン！

音を失くしたこの世界

全てを賭けて突き進もう！

『三番カリスタベット、先頭を進みます』

まだ前は意識するな……

『続いて五番ディクターブレイブ、さらに続いて……』

『おっと、六番ラ・ジャポーネ出遅れています、あれは厳しいかもしれませんね』

はは！勝手に言ってな

俺はそんなことよりも

「やっぱりお前に乗ってる時が今までで一番楽しいぜ！」

遅いスタート

しかし、確実に加速し続けるその姿は今までで俺が乗ってきた馬とは明らかに違う。今まではどれだけ終盤までスタミナを残せるかを、どれだけ馬群に吞まれないかを考えていた。

だが、こいつは違う。

ただ不安を感じさせないように好きに加速させて、俺はその手綱を握って他の馬を避ける。

言ってしまうばそれだけだが、全てを無視して歩み続けるこの馬を操るのは至難の技。

だから、こいつは楽しいんだよ！

『一番ルビークラウンも上がってきました』

もつとも今はそんなことを考えるよりも差が開きすぎてるのが問題だけだな！



『さあ、六番ラ・ジャポーネやはり大きく出遅れています』

「ジャポーネ……」

自らの愛馬の名を口にする。

そのスタートはあまりにも遅く既に前方の馬からは5馬身ほど差をつけられているようだ。

このままでは勝負は見えている。

だが

「やっぱり諦めてないんだな……」

その走りは全力

諦めることはない

ゆえに

「がんばれ……」

いい年をしたおっさんが恥ずかしいと嗤われるかもしれない。

なぜ勝てる見込みのない馬に賭けるなどただのバカではないと嗤われるかもしれない。

しかし

「がんばれ！」

この衝動は鳴り止まない

恥？ 嘲り？

そんなものはどうでも良い

「がんばれ！」

加速して 加速して 加速して

『六番ジャポネ最後尾を捕えた！』

「いけー!!!」

この衝動のままに！

『六番ジャポネとてつもない勢いで加速していく！、ここでついに！』

「あはは！、お前の馬主さんの応援が聞こえたか!!、こっからが正念場だぞ相棒!!!」

馬群の最後尾を追い越したとはいえ、広がったこれを抜けていくのは困難。

けれどそれを成さなければ勝利はない。

「なら俺が足掻くしかないよな相棒！、そんなま全開で頼むぜ！」

まずは一つ！

隙間を縫うようなレースは難しい

次に二つ！

なら大外に広がればいい

三つ！

『六番ジャポネ！、大外を上がっていく！、そして今！ダイクターブレイブを抜き去った!!!』

新馬戦で大外に広がるバカのカバーなんて考えやしねーだろ！

こいつで五つ！

それまでのペース配分も！

相手との距離を測るのも！！

内側を狙う努力も！！

全て水泡に帰せ  
!!!!!!

最後に先頭を抜き去るその場所は

『第四コーナーを曲がって、先頭にいるのは!!』

『ジャポーンだ!!!』

最終直線の前！

「チエックメイトだー!!!」

『六番 ラ・ジャポーンが上がってきました』  
2000m

榛原くんがギリギリだと睨んでいたその距離

その差が

その不利が

できるだけ内側を狙うその努力を

大外から嘲笑うかのように加速は続く

『六番 見事なごぼう抜きを見せる!』

興奮で口調が乱れる実況

何もかも呑み込んで全てを抜き去る。

『第四コーナーを曲がって先頭にいるのは!!』

『ジャポネだ!!!』

余力を残していたと言わんばかりにその力強い走りは止まらない。  
そして

『その加速は衰えない!、直線に入ってからむしろ速くなっていく!』

『これが2歳馬の走りなのか!!』

『後続に六馬身差をつけて!』

『一着は六番 ラ・ジャポーン!!!、最後尾から全てを抜き去っていった!!!』

先頭に走り続けるのは『ジャポーン』だった。

## 初勝利は無音の拍手

「止まっていいぞ」

くいつ くいつ

『ん、終わった？』

一切の歓声もなく、かといって怒号を浴びせられることもなく、始まった時の静寂のまま終わったレース。

人気のない馬の勝利に馬券を投げると噂の競馬場おじさんがいなかったようで、どうやら順当に人気な馬が勝利したのかと肩を落とす。

周囲に誰もいないように感じられたのは、周回遅れの先頭であったのかと、落胆と失意に沈む私であったが、友から聞こえるはずの悔しい叫びが漏れていないことからもしかしてと思いいじつと見つめる。

「ん、どした？」

『誰が勝ったの？』

「ああ！、勝ったのかってことか、ああそうだぜお前の圧勝だよ、六馬身差だぜ、新馬



戦だとしても2000mに勝ったのは控えめに行って奇跡だぞ！」

『ん……………、勝ったのか』

「おうよー！」

ならばこの静寂はなんなのだろうか

私が一番人気だった？それだとしたら嬉しいがそれでも歓声の一つは聞こえるものではないか…………。

この時代がいつのことかは知らぬが、勝利を称えることもなく、敗者へ感情をぶつけることもなく、ただ無味乾燥の極みのような静寂に包まれるこの空間は、果たして競馬場と呼べるのだろうか…………。

それでも喜びに叫ぶ友がいることが私の唯一の救いだが、それでもこの虚しさはどうすればよいのか。

怒りとも悲しみとも呼べぬ、えたいの知れない不吉の塊が私の心をおさえつけている。

これを抹消しえるのは何なのかという疑問を消し去ることもできずに

『神よ、なぜこの身にこのような半端な心を残したのか！』

ただ誰にも伝わらぬ咆哮に思いを乗せるだけ

なぜ私はこのような不吉を背負っているのか？

まさかとは思うが……

歓声を浴びたい？

努力を認められたい？

そんな理由か……

ああ、それだとしつくりくる

しつくりきてしまう……

なんだ私は……。

まるで子どものようなではないか……。

畜生に転じた身体が人間の心を蝕もうとしているのかと考えるが、そのような思考に至ったこと事態が既に答えを示していることを直感では理解してしまう。

ああ、例え望まぬ形であつたとしても、大いなる自然の理に反し、前世の記憶とやら

を持ち生まれてしまったことの報いがこのような形で発現するとは、嘆くことを忘れようとしたこの思考すらも忘れてしまう未来が来るのか……。

ならば死を恐れたこの心も馬のいや、生物の本能だったというのか……。

なんとということだ！

望んだ生は紛い物で、既に人の心を失っているのではないか……。

いや……、これこそ彼の莊子の語る胡蝶の夢というものではないのだろうか。

私が人間として生きていたという記憶は、実は胎児の時にこの馬が見ていた夢であり、人間から馬に転じたという奇妙な現象は、ただ夢から目覚めたというだけであり、人の心というものは夢の中の意識だったのではないか。

だとしたら納得だ。

夢というものが記憶から薄れていきことは決して不思議なことではないし、少し残った人の心は産まれ直しによって、改めて生を始めようとしているということ、思考が子どもに寄っていくことは自然なことだ。

いや、輪廻の輪を廻ったとなれば超自然と呼ばれるものだが、夢というのなら自然なこと……、のはずだ。

そうとわかれば……、とはならないが、すぐに取り乱す必要はないとわかると途端に疲れが出始めて、運ばれるトラックの中、こくりこくりと船を漕ぐことになるのだった。

いつもの部屋に入ると、少し潮の匂いがする初日に世話をしてくれた男がいた。

潮……、いや涙か、を流す男は、私が勝利したというのに、悲しそうな表情を見せる。なぜそんな顔をするのだと尋ねても、言葉が届くことはない。

そういえば……。

彼から香水の香りが消えている。

『あつ……』

私に愚痴を垂れている節がある彼が私の部屋で泣きながらぼやいているとなればこつぴどく振られたに違いない。

ほれ、私がいるぞと身体を擦り寄せてみるが、余計に涙が流れるようで、こちらもしイラつとして小突くとうやく泣き止んで強引に口角を上げて笑っている姿は少し痛々しいけれど何とか立ち直る覚悟は決めたようである。

「うう……、そうだよな一番悲しいのも、一番辛いのもお前だよな……」

ふむ、おそらく『ありがとう』言っているのであろう。

そんなに誉めなくても良いとのんびりと頭を擦り付けるとやっとわしゃわしゃと頭を撫でられた。

「それじゃあ、あんまり長くはいられないが、いつでも帰ってきてくれよな……」

そのまま何かを呟いて帰っていった

翌日

『走りたい……』

「ん、身体が鈍っちゃったか？、走りたいなら付き合うぜ」

『お願い』

完全には消えない不安を解消するためには走ろうと思えばかみたくに足を動かすが、そのこともガキ臭いように思われて、その足は止まる。

ほんの少しの絶望の繰り返しで人は成長すると、どこかの漫画に記してあったが、成長はこの紛い物の人の心を失うことを意味していると思うと生きるということに意味を感じられなくなる……。

いや

それは私が、偽物であった、平凡にすらなれなかった夢のない人間であった時と変わらない

なら

私はこれだけを

生きる意味を

死ぬことが怖いんじゃない

ただ

死にたくないから生きていると

それを忘れずに生きてみよう

そしたら

胡蝶の夢に終わった彼の慰めになると

夢として終わった人間と人を捨てた馬と

入れ替わるのは何気のない日

今日はこれでおしまい……………。

その終幕が醜いバッドエンドだとしても

それでも、必ず明日は来ますよ

絶望の未来が待っていたと知っていても

だって、彼らは生きることを決めたのですから

## お別れの馬

『うおおおおおおおおおお!!!!!!』

大歓声と共に迎えられるのは勝者

例え自らの賭けた馬でなかったとしても、彼らは伝説の誕生を見たのだ。

それだけでもなんとも言えない雨模様空を無視して、ここまで来た甲斐があったというもの。

六馬身以上の差を覆すどころか、それを全てを引き離しての勝利、誰でも夢を載せたくなるものだ。

それ故に熱は増して行く

最高潮の興奮に浴びせられるは歓喜の叫び

これこそ勝者の特権だ。



祝福するかのように射し込む光りがその灰色の姿を照らす。

「ああ！、勝ったのかってことか、ああそうだけお前の圧勝だよ、六馬身差だけ、新馬戦だとしても2000mに勝ったのは控えめに行つて奇跡だぞ！」

突然の喧騒に驚いたのだろうか、誰が勝つてるのかわからないというような思念を飛ばす相棒に俺たちの勝利を伝える。

一緒になって喜ぶと思つた相棒が冷めた姿をしているのは少し気になるが、それでもこの喜びは何物にも変えがたい。

喜びを共有するためにポンポンと相棒を叩いていると

『 』

爆音の嘶きが響いた。

その姿は周囲には勝利を誇る嘶き

スポットライトの当たるかのような太陽の光

英雄の勝鬨に見える……

だが

「何がそんなに悲しいだよ相棒……」

消え入りそうなその感情は

ただ一人、帰る場所を失くして

雨に濡れる子供のように思えてならなかった。

「きついな……、こんなの慣れっこなはずなのによ……」

新馬戦まで馬の体調を気にして延期にしてもらっていたトレーニングセンターへの輸送が三日後に定まった。

そんなわけで厩務員一同は皆、何ともいえない虚無感に襲われていたのだ。

昔、問題児を育てていた時、彼が旅立っていった時の感覚にも似ているそれは、彼ら

の心に穴が空いたような感覚をもたらした。

とはいえ彼らもプロである。

すぐに持ち直して、仕事に取り組むわけだが、そのうちの一人、始めにジャポーネを連れてきた彼は人一倍失意に沈んでいた。

彼にとってその馬との語らいは日常の一部となっている。

本馬にその意識はないだろうが、彼女に振られた日も、友人関係の相談も、その語らいによつて救われてきたことは多い。

故に

「ずっとここに居てくれねえのか……」

そんな女々しい言葉をジャポーネに吐き出していた。

いや、それが難しいこと、というか不可能なことは誰よりも理解しているし、似たようなことは腐るほど経験してきた。

それでも、この別れは寂しいものである。

そして涙を流す彼にいつものように……、いやどこか期待していた通りに

『バフツ』

身体を近付ける。

いつもなら嬉しいはずのそれは、明らかに高い声色でどうもバカにしているような口

調なのが腹立たしい。

少しイラっとして背中をいつもより強くポンポンと叩くが、それも堪えていないようで、少しだけ早く叩くと流石に気になったようで頭をゴツンとぶつけてくる。

そしてその顔を、悲しみに直視できなかつたその瞳を見ると……

「泣いてるのか、お前……」

その瞳は濡れていた。

寶石のような輝きを持つその瞳は、普段よりずっと濡れていて、妖しい輝きを秘めている。

「そういえば今日、榛原さんが……」

『悲しみ咆哮が聞こえたよ……、もしかしたらあいつもわかつてんのかもな』

『お別れの日が近いことを』って言ってたっけな……」

そう思うところの明るい声は瘦せ我慢のようにも見える。

「お前もわかつてんのか……?」

『ふー』

肯定するように首を振る……

その姿はうちに来た時と同じ様に堂々と、しかし気高くあつたが、それでも、別れに涙を堪えきれない様子である。

「そうだよな……、一番悲しいのも、一番辛いのもお前だよな……」  
立ち上がり自分の頬を叩く

「それじゃあ、あんまり長くはいられないが、最後まで仲良くやろうぜ」  
ゆつくりと背を向けて歩きだす。

今生の別れでははずなのに、この足は動こうとしない。

そんな女々しい自分に嫌気が差す。

覚悟を決めたはずじゃないか……

再度頬を叩こうとした瞬間

『 』

世界が割れるような轟音と共に嘶く馬があつた。

激励

大したこともでもないのに、くよくよと悩む俺への激励だ。

今までどれだけ女々しい相談をしても聞くことはできなかつたその嘸きが、別れを惜しむだけで立ち止まっている男に向けられている。

ならば

「いつでも帰ってこいよ！」

こちらもバカみたいに、今すぐの別れでなくとも言つてやるのだ。

またいつか会える日を

共に語り合う日のことを

「いつか」

いつかお前が帰つてきた時に

「また語り明かそうぜ」

そんな一方的な約束と共に

夕日に向かって歩み始めた

## 親分との出会い

『ほれ、行くで鼻垂れ』

やあ、同士よ。

まあ座りたまえ、私は二度目の引越しを乗り越えて、ここに来た。

そして今、ボスらしき馬に気に入られている！

ああ、かつてないこの高いテンションに皆さん驚いただろうが、この馬生にて始めて意思の疎通ができる同族と出会ったのだから許して欲しい。

このボスらしき馬の名前も、本当にボスであるのかも知らぬが、周りから恐れられているのを見ると、間違えなく隣にいれば他の馬へ対応する必要性がなくなると考えれば、たまに蹴られる心配にも耐えられるというものだ。

『いつまで寝とるんや鼻垂れ！』

『へいへい』

ボスが呼んでいるからな続きは後にしよう。



『相変わらず遅いな、お前は』

『あと二キロくれたら、ボスの足を潰せる自信はありまっせ』

『はは、抜かせ！ 返り討ちにしたる』

それではいつものように、ここに来た時のことを語るとしよう。

ふむ……、三度目の引越しもなれば流石に取り乱すことはなかった。

どれだけ歓声のないつまらない勝利であったとしても、新馬戦に勝利した馬を殺す必要性はないであろう。

特に問題を起こしていない上に、基本的に人間様の命令に背いたりもしていない私をここで殺す必要性も薄いのだから。

そんなわけで気楽な旅行を終えてここに来たわけなのだが……。

大きいな……。

基本的に同年代の馬たちは私よりも小柄であったため、言葉を無視してくるような馬が相手であったとしても、手が出しにくかったのであろうが、ここにいるのは成熟しきった馬。

おそらくシニア？ と呼ばれる階級を走ってきた歴戦の猛者たちなのであろう。

そんな中でコミュニケーションができない馬が一頭混ざればどうなると思う？

ああ、囲まれてのリンチであろう。

『おうおう、お前！、先輩に挨拶もせずは何をしとるんや？』という具合にボスからハブられて、自分に潰されるに違いない。

そんな新たな恐れに震えていた……、いや気楽な旅という言葉は取り消そう。

今回もいつものように、心が粉々に砕け散っていたのだ。

そんな私を救ってくれたのがボスだった。

いつも厩務員、彼女に振られた彼である、に手綱を引かれて、トレーニングセンターらしき場所に到着した私を待っていたのは、前述の巨大な馬たちである。

いや、巨大と呼ぶには語弊があるのだが、威圧感なども含めたものだと思ってもらえたとわかりやすいかもしれん。

新入りである私をじろじろと眺める奴らが、何かをぼやいているように口を開くのを見るたびに、恐怖で震えることしかできなかった。

だが何よりも、隣の部屋に、顔を見合わせることができる程度には解放感のある、いた馬が恐ろしかった。

『ん、新入りかいな』

『ひえっ……』

『ん？、失礼なやつぢやな、何を突つ立つとるんやおどれは？、それと何や？人を見た

途端に悲鳴とは、食われたいんか!』

体格は大したことないのだが、放たれる覇気のようなものが抜き身の刃のような誰も近づけないようなものだ。

見れば放牧の時も、彼に近づぐことを恐れる馬が多く、一人でむしやむしやと芝を食んでいる。

馬基準でも恐ろしい存在であることを知った私は、どうしてもっと分厚い、それこそ顔も出せないような檻に奴を閉じ込めていかなかったのかと、怒りの余り寝込みそうになった。

しかし、数時間後に冷静になれば思うのだ。

『なぜ彼の言葉が聞こえるのか……』

そう、今まで聞こえなかった馬という生命体の言語がすらすらと頭の中に流れ込んでくるのだ。

私の馬主やジョッキーとは違う、明確に頭の中に言葉が流れてくる。

それこそ、トレーニングセンターに馬がいることと同じように、当たり前のことのようにその馬の言葉が理解できる。

だが、これを好機に馬の言葉を解読しようと考える前に、人間の言葉に変換されるものだから結局このお隣さん以外と会話を行うことはできんでいたのだった。

この時ほど……、いや、産まれた時から人間の記憶を持ったことを恨んではいる。

『あのー……親分?』

『ん、邪魔やぞ鼻っ垂れ』

『後ろ失礼させていただきやす……』

となると私にできることは一つ、この抜き身の刃のような馬に気に入られることだけ。

それからはいろいろとやってきた。

『何で人間どもはわいに芝を走らせんのやろうな?』

『親分があんまりにも力強いもんだから人間どもも勘違いしてるんでさ』

『世辞ならいらんで、ほれ走るで』

『あいあいさー』

レースでなかなか勝てないという親分の機嫌を取ったり、愚痴を聞いたり。

『おらー!、白いの!、もう帰る時間だぞ』

『あ!、おどれごときに従うわいやないわ!』

『(良くわからんが) そうですね、親分の言う通りでさ!』

放牧中も鬱陶しいボス?らしき馬を一緒に追っ払ったり。

『ん、それ旨そうやな?』

『へい、どうぞ親分』

『いや、止めとくは』

別に好きでもない果物を譲ったり。

まあ、いろいろとやってきて、やつとこさ受け入れてもらったわけだ。

そのお陰もあって、ボスらしき馬以外から言葉を浴びることは消え、やつとこさ、親分の背中を歩くことを許された。

これで、ようやく大手を振るってこの場所を闊歩することを許された。

これまた唐突な話なのだが……。

ここでの訓練は随分と真剣だ。

いや、あの場所でのトレーニングが温かったのかもしれない。

とはいえ私の気分でトレーニングを決めることは許されなくなった。

しかし、親分との会話以外では暇な私にとって大抵のことは暇潰しとなるし、その疲れすら気持ちのよいものになる。

そんなスポコン漫画展開を乗り越えたことで、私は筋肉モリモリマッチョマンの変態競走馬に近づいた。

そして運ばれるトラックの中  
試される大地にて……。

「ここも久しぶりだな」

『いや始めてだけど?』

「今日はあの時よりも短けえからな、いつもより気張っていけよ」

『は?、無理でしょ』

地面に水溜まりができています。

そして

『雨降ってるけど』

たしかにぐちゃぐちゃのダートを走らされたことはあつたが、実際にびしょびしょに濡れながら走るのには始めてである。

遅れを取るつもりはないが、誰かを背に乗せて落ちることを考慮しながら走るのはいき  
つい。

「おいおい、安心しろ、いつものように走れば大丈夫だ」

『かなり派手に曲がるよ?、しっかり捕まっていないと落ちるよ?』

「上等だ！」

『……、まあいつか』

「おう、気楽にいけ、気楽にな」

それでは改めて

日本一の雪の大地は

今は青い空のまま

再び入る真つ白ゲートは

酷く窮屈に思えてならない

ここに咲くのは秋の桜

それじゃあ

始めるとしよう

## おかしな馬

思えばおかしな馬だった。

「まあ、お前に任せるよ」

おとなしくて、言うことをしつかり聞いて、人間のバカみたいな話にも頷いてくれるのも

「流石に先輩にお願いしますよー」

始めて会った日を思い出させるような堂々とした歩く姿勢も

「なんだかんだお前が適任だろ、しつかり届けてやるんだぞ」

レースの時に見せた圧倒的な走りも

「ほれ、泣くんじゃないよ男だろう？」

今、こうやって手綱を引いていても思うのだ。

やはりおかしな馬であったと

とある厩務員は、実際に馬に乗る騎手でもないのに、馬との出会いを運命だと直感したらしい。



自分とこの馬の出会いはずっとそれと同じようなものだったと思う。

ただ日々の世話をするだけの仕事

馬からは舐められることもあるような自分たちが感じた運命。

その運命を

たった一頭の運命を乗せて

いつものようにトラックは行く

永遠と続いて欲しいこの時間は

一息と共に流れていった。

「よし、頑張れよ」

何と言うか……、こいつからもくどいと思われていそうなほど別れを繰り返したが、最後の別れは笑って見送ってやれそうだ。

大手なんてものではない、関西の馬を一手に引き受けると言っても過言ではないこの場所の人に口が酸っぱくなるほどの注意の言葉を重ねたことは、改めて考えても野暮なものでないことだったと思う。

それでも、昔、といっても半年程度だが、ジャポーン産まれ故郷である牧場の彼らも同じように口を酸っぱくしていたのを思い出すと、やはりこの馬には我々人間を魅了する何かがあるのだろう。

手綱を向こうの厩務員に渡す。

少しも拒む様子を見せないのは癪だなと頭を撫でる。

最後は日常のように

おそらく別れを理解していたにも関わらずこの冷たい別れ。

改めて人間臭い奴だと思う。

「それじゃあ、よろしくお願いします」

「はい、しっかりと預からせていただきます」

大袈裟に振った腕と同じように振り返された尻尾に少し吹き出した。  
やっぱり笑って見送れそうだ。

おかしな馬ですね……。

始めての人間に懐くというのは特別なことではありませんし、ここに始めて来たのなら他の馬の大きさに驚いて、こちらに助けを求めてくる馬も出会ったことはあります。

おまけに彼の隣には気性の荒い馬が一頭。

耳が聞こえないのであれば、人間に助けを求めることは自然なことですし、気にかけてくれているボス馬であつたとしても恐れることは当然だと思えます。

ですが……。

「懐く相手が違うじゃないの？」

彼がその身を寄せたのはなんと隣のヤクザのような馬でした。

いえ、人間より遥かに善良な心を持つている動物たちに対して、そのような表現はどうかと思われませんが、その馬は、同族であろうと人間であろうと嘯みついてくる猛獣のような馬です。

友とするのにも、ボスと仰ぐにも適した存在であるとは言い難いです。

況してや、馬というものそのものを恐れるような馬が信頼を寄せるといのはおかしなことです。

このようなことになつた経緯ですが……。

「とても人懐っこいですが、馬との関係は基本的に無視してばかりなので苛められないように……、いや、賢い子なので正当だと思えば反撃する可能性も……、できるだけ他の馬とは……」

「あはは、大丈夫ですよ」

「あつ！、すいません話し込んでしまつて……」

「ふふ、賢い子なんですな」

「はい！、耳が聞こえないはずなのに人の……、

多くの厩務員さんは意外と馬への思い入れがないことが多いのですが、この方はとても可愛がつっていた様子。

特別可愛がられた馬はその人に懐きやすいので、彼の言う『人懐っこい』というのは当てになりにくいですが、のんびりと待つている姿を見るとおとなしいというのは確かなようです。

「あ……」

「どうかされましたか？」

「いえ、さつき自制したはずなのにまた長々と……」

「いえいえ、可愛い子を預けるのですから心配になるのも当然ですよ」

そんなお節焼きの彼の手綱を預かつて、ゆっくりと部屋へと歩き始めます。

大袈裟に手を振る姿に、合わせるようになりズムで尻尾を振っているのは非常に愉快な子だなあと感じさせますし、一切の抵抗のない姿に驚きながらも、新入りに視線を送る先輩たちから隠れるように私の影に入った時は本当に愛嬌があるなと思わされます。

この性格なら、群れのボスに気に入られなにとろくに周りに馴染めないかもしれませぬね。

ですが、私は失念していました。

馴染む、馴染めない以前に彼の部屋の隣には気性の荒い馬が一頭います。

『タママクロス』

人間にも、同族にも牙を剥く獣のような、いえ、馬は獣ですが……、馬です。

案の定、彼に見つめられたこの子は私に助けを求めるように目を向けます。

完全に我々の調整ミスなので、早めに部屋割りを変えないといけません。

落ち着いてと頭を撫でますが必死で身体を寄せるのを見ると、やはり可哀想で、付きつきりで隣にいたくなります。

この仕事を続けると、男であったとしても母性のようなものが芽生えるものです。

「大丈夫ですよ」

とりあえず落ち着いてくれれば良いと耳もとで声をかけながら頭を撫で続けます。

すると少し瞳を閉じて、落ち着いてくれたようです。

耳が聞こえないという割には、随分と音に信頼を置いているのかと驚きながらも、その日にまた顔を合わせることはありませんでした。

さあ、翌日

早朝の放牧のために厩舎を訪れたのですが、やはり怯えた様子で私の顔を見た途端に駆け寄ってきます。

隣の部屋を見るとふてぶてしく眠っている馬が一頭。

いけません

この子には何かお節介を焼きたくなるものがあるようです。

本来なら平等であるはずの厩務員が鼻臍目で見てしまっているようです。

「あなたは人を魅了する魔女のようですね」

そんなことを口走りたくなる程度には、この馬の魔性にやられてしまったようです。

「それでは行きましょうか」

とりあえず別の場所に放牧する方針の通りに周りの馬からは見えない場所に放します。

すると水を得た魚のように跳ね回ったのです。

現金と言うべきなのでしょうが、周囲の馬の視線が消えた途端に幸せを全面に出しています。

群れることもできず、周囲の音を聞くこともできず、それでいて穏やかな気性をしたこの姿を見ると野生で生きることが絶対にできない馬であると思ってしまう。

そして一瞬の加速で逃げることでできないとなるとあつという間に食べられてしまひそうです。

派手に暴れた後、疲れましたというようにぐったりしている姿も母性を刺激してきます。

数日はこのようにこの場所に慣れるための放牧が続きました。

その時からその片鱗は見えていたんでしようね。

その馬の背中を追いかけたり、目を見合わせることを見かけることも増えたり……。

いえ、かなり露骨でしたね。

理由は全くもって理解できないですが、引越してから数日で馴染んでいた様子ですし……。

茸毛という点に置いて、何か通じ合うものがあつたのかもしれない。

そして集団放牧デビューの日

そこにいたのはタマモクロスの背中に着いて歩く彼でした。

職員一同で呆然唾然です。

始めて顔を合わせた時の怯えとは何だったのでしようか!?

困惑と幸せそうなその背中に対する安心で心の中がごちやごちやになります。

とはいえ、こうもぴったり張り付いたように近づいていると職員たちが手を出せないほど……、いえ、出す必要がないほど仲の良い様子なのですが、の信頼関係を感じられません。

そんな不思議な二頭はのんびりと草を食み、時折駆けっこをするように走り始めます。

唐突に喧嘩を始めたりはしないかとハラハラしている我々の心配を置き去りにして、数年来の友人であるかのように振る舞うのを見ると、心配は霧散してゆくのでした。

さて

そんなおかしな馬でしたが、そのおかしさは調教の際にも発揮されます。

集中心力がありすぎるのでしょうか？

眼前に馬がいたとしても、一切の加速を止めることなく突っ切ろうとします。

そして自分の限界を上手く理解していないのか、延々と走り続けてコースの中で寝てしまうのです。

どれだけ振動を与えても眠ったままの姿は、はつきり言つて邪魔なので調教の時間をずらすことに決まりました。

ほとんどの調教で、すやすやと眠るものですから周囲からは眠り姫と呼ばれる始末で



す。

そんなおかしな彼の二回目のレース。

その名前は『コスモス賞』

中央のオーブンレースの一つです。

当日は雨の予定

どんな時でも眠っていた彼に心配は無用でしょうが、少し不安になってしまいます。  
可愛い弟分が旅立つのを兄貴も見ているようです。

激励をするように鼻を近づけた二頭。

そして、そのまま別れた二頭。

その日のタマモクロスは普段より少しおとなしかったのでした。

## 秋桜の咲く場所で

「やっぱヤバイかもな……」

『どれが強いのか？』

聞こえていないと思ったのだろうか、先程の元氣付けるような明るい口調はどこへ消えたのか、私の上にいるジョッキーはずいぶんと弱気である。

どうやら共に走る馬に矢鱈と強いのがいるようだが、生憎仕上がっている私は、相手がなんであろうと負ける気がしない。

ならさつきまでの心配はなんであつたのかと笑われてしまうだろうが、自信は過剰な程度で良い。

ここ最近に学んだことであり、レースに勝つために必要なことである。弱腰になると周りを見てしまい自然と足を止めてしまうものなのだ。

折角の持ち味が潰れてしまう。

そんなことを危惧した結果生まれたひとつの解であった。

まだ幼少のことなのだから、大した根拠のないことを盲目的に信じてみるのも、悪くない。

どこかで聞いた言葉を参考にした結果である。

だがそれも

『ザー……』

この雨がなければという前提の言葉ではあるが。

いや、雨というには語弊があるだろう。

本当の敵というものは大したことのない雨ではなく、どろどろの芝と呼ぶのすら憚られるこのコースであるだろう。

日本の芝というものは質が良いものだと思っていたし、その事に違いはないのだろうが、そもそも土というものが雨にはすこぶる弱いのだと思いが知らされた。

似たような土を走ったことはあるが、それも一人でのこと。

いざ走るとなれば他の馬に集中を切らされて敗北する可能性がある。

となると信じるのは馬上だけ。

『何も見るな』

今日の方針は決まった。

となれば後は……。

『勝つただだよ』

「無理……、とは言わねえがちよいと厳しいか？」

別定戦

馬の性別や年齢、レースの実績などで積量を増減させるレース。

三歳馬（現二歳）との新馬戦では調子が上がらない中での勝利ということもあり、その実力は確かなものであると証明できた。

ならば、ひとつ年上の馬が出馬する可能性のあるこのレースで腕試しと考えたんだが、そこまで都合の良く望みの馬は現れず、皆揃って三歳馬。

それだけなら良かった。

いや、これからの経験という点では良くないがここで勝利してクラシック戦線へ向け

て弾みをつけるのも良いだろう。

しかし

「トウシヨウボーイの娘ね……」

それでいて新馬戦を七馬身差で圧勝したと聞く。

現実がどうだったのかわからない。

その結果に至るまでの間に何か事件があったのかもしれないし、他の馬の調子が悪かったのかもかもしれない。

それでも七馬身差だ。

2500m以下は本気じゃないと確信を持って言える自信はあるが、新馬戦の2000mでは他の馬はバテていた可能性が高い。

言ってしまうばそこそこの距離があった。

それで六馬身差だ。

1200mで七馬身差。

それが雨の中の重馬場。

距離としても、実績としても敗北している。

今日が不良までいくのなら運の勝負、まだ勝機はあつたかもしれないが……。

それを示すようにスコアボードの人気は二番手、面白い走りをするという点からの前回付いたファンを含めても一番人気には届かない。

ただ

「俺が弱い気でどうすんだ！」

頬を叩く。

相棒からは勝つという意志だけを感じる。

気持ちで負けてたらどうすんだってやつだ。

行くぞ

シトシトと雨音が響く函館

瞬きひとつ許さぬレースで瞳を瞑るは灰色の馬。

曇天の空は誰に微笑むか……。

トン

合図はした。

この雨音に掻き消されないことを祈りながらゲートが開くのを待つ。

『バン』

とん

少し鈍い音で開いたゲートと同時に、二度目の合図にしっかりと反応した相棒は、新馬戦とは比べ物にならない力強さで大地を踏み締める。

ぬかるんで滑りそうになるなら上から踏み固めてやるという力業。

『さあ、綺麗なスタートで始めました、やはり大外を走る二番人気、五番ジャポネは今日も遅れてのスタート、対して一番人気クラトウシヨウは素晴らしい走りです』

『いえ、スタートこそ綺麗でしたがペースの遅いレースですね、昨日からの雨によって不良とまではいかずとも重となっていたのでそこも注目したいです。

先頭は三番、次点は六番ですが馬群の中にいるのでアドバンテージはないと言っているでしょう』

実況の言葉の通り、ペースの遅いレース。

相棒は瞳を閉じて完全に俺に委ねるとかいう馬鹿みたいなことを提案しているから影響を受けちゃいけないが、他が辛そうだ。

「それも……」

『ペースを作っているのはクラフトウシヨウです、やはり意識しなければならぬのでしょうか?』

『先頭を走る馬も、下手にペースを速めると喰われかねませんからね、後方から詰めてくるジャポーネも相まって他の馬は走りにくいでしょうね』

モヤモヤと漂う湿気が絡み付く、どれだけ加速しようとも爽快感のないレースに息が詰まりそうだ。



「大丈夫かあいぼ……、聞いちゃいないか」

泥を撥ね飛ばすような走りではないが、確実に踏み固める走りは乗り手に安心感を与える。

身体も温まっているようだし、こちらとしてはかなり安心できる。

『現在は順位は動いていないようですが……、おっと！』

『おつ、ジャポーンネが上がってきましたよ』

『それと同時にクララトウシヨウも馬群から抜け出したー！』

『そして乱れた馬群によって他の馬は詰めるに詰められない状況になりましたよ』

前との差はぎつと三馬身、前回に走ったであろう1200mはとづくに通り過ぎた。

となれば

「ここからは俺たちが主役だぞ」

追い越しには十分な加速。

それに対して有り余った体力で速度を速める背中。

差し掛かったコーナーで一瞬だけ距離を詰めたものの、その背中は遠い

『後方の馬が詰めることができないのは何故でしょうか?』

『ここであの二頭を追うと入着すら不可能なほど体力を使いますからね、安定を取ったということでしょう』

実況の声が聞こえる。

ならば

「見るのは前だけだ！」

奮起するように速まる足を頼りに、全てのリソースを割く。

「いくぞー！」

『最終コーナーを回って先頭にいるのはクララトウシヨウ、しかし、ジャポーネの足は十分に温まっている！』

『直線を走る二頭、両者凄まじい速さでゴールへ向かっていきます！』

「こんにやろ！」

『後方から迫ってくる、ジャポーネ！、しかしまだ届かない！』

『どちらも譲らないですよ』

辛うじて並べる距離。

『ジャポーネが抜いたか!?!、いやまだか!、クララトウシヨウが粘り……、いやジャポーネが前に出た、いやすぐに抜き返す!』

いけ!

『そして今!、両者ほぼ並んでのゴール!』

『パツと見だどどちらが体勢有利なのかもわからないですよ』

『そして六番、四番と順番にゴールです』

『見応えのあるレースでしたね……』

結果は……。

『今、結果が出ました』

『一着は……』

『五番、ジャポーンネです！』

「っ！」

最後まで纏れ合ったレース

秋桜の主に選ばれたのは……

その鮮やかな色とは正反対の

灰色の馬であった。

# 聴こえなくとも

速く

はやく

ハヤク

何も聞こえないのは、音を置き去りにしたと思いつめ

何も見えないのは、光を置き去りにしたと思いつめ

自分が天才だと叫べ

自分が最強だと叫べ

自分を集中させるために自己暗示を繰り返す。

風を遮るものはない

私を阻むものはない

何度目かのコーナーを乗り越え……。

これが最後のコーナーだと直感する。

しかし、隣には風を遮る何か。

ああ、ここまで着いてこれるか……。

基本的にここまで来たのなら着いてこれる馬など今までは一頭もいなかった。

自分の世界の狭さを知ると同時に負けられない意思が足を動かす。

疲労はない

加速は続く

しかしその風を振り切れない。

いけ

いけ

いけ

どこか他人事のように身体を動かし続ける。

そして



振り切った風は消え

生温い雨の降る現実とが帰ってきた。

勝利したのかもわからない戦い

ただあるのは何とも言えない不完全燃焼。

それでも……

開いた瞳が始めに映したのは……

『 』

万雷の拍手であった。

確かに聴こえないのだ。

怒声も、歓声も

しかし

それは確かにそこにあつた。

少し早くないだろうか……。

報われるのはもつと先、G1の舞台が良いのではなかったのか……。

ゆつくりと止まった身体を馬上から伸びる手がそつと撫で付ける。

「あはは、勝つたな」

クライマックスな空気感。

これを通過点と見れる人間というのは、なんと強欲で、向上心の強い生き物なのか。二回目の戦いで負けそうになるとは、私という馬の世界はどれだけ狭かったのか。

延々と降り続ける空は私の肌のように灰色。

けれど

確かに残された視界から見えるのは空色の青。

見上げる空は美しい

輝き続ける太陽の赤も、永遠を象徴する星々の輝きも、何物にも代えられない不変のものだ。

でも

『帰ったら特訓だね』

「お、まだやる気だな、相棒！」

『ちよつと頑張るだけじゃ足りなさそうだし』

見下ろした先にある、例えば

母のように包み込む海も、人が作り出した仮初の光も、きつと美しいはず。

「それじゃ、帰るぞ相棒」

『うん』

『ただいまです、親分』

『んー、やったらしいやないか鼻垂れ』

『そうらしいつすよ』

『なんや、自覚はないんか？、随分と強いのに辛勝やったらしいやつて聞いたで、鍛え直しやな』

『なんで知ってるんすか……』

帰って早々、いや、隣にいるのだから一番に会話するのは当然であろうが、親分から歓迎を受けた。

しかし、先日のレースで入着こそしたが、一着になれなかったことで嫌みでも言われると思っていたものだから、このさっぱりとした対応に驚かされる。

いや、そんなことよりも私のレースの詳細を彼に語った厩務員の方がよっぽど驚きの存在であるだろうが。

何て失礼なことを考えながら、生産性のない会話に応じる。

全力で走った後、いつもなら眠気に襲われるはずの暗闇でも、二頭の夜は深まっていゆく。

『ん……』

翌朝、長く語り合っていたかと思っていたが、朝日と共に目が覚める。

馬に限らず草食動物は長く眠くことができないとも聞くが、生きている間にそんな経験はなかったはずであったもので、迷信でしかないと思っていた。

しかし熱の冷めきっていない日、野生ならば日常茶飯事のことであろう、は、浅い眠りをするようだ。

隣にいる親分がまだ眠っているようで、起こすのも憚られる時間ということあり身体を揺らしながら厩務員を待つ。

待ったところで何があるのかと言われれば、トレーニング前の朝飯前の挨拶程度のご利益しかないのだが、食物というもの、正確に言えば食糧という行為は生きることそのものでもある。

ならばそれを与えてくれる存在には何であれ敬意を払うものだろう。

そんなこともあり、今生での『いただきます』は食糧の命と作ってくれた厩務員への感謝を込めて二回唱えるようにしている。

「飯だぞー、つと今日も礼儀正しいなお前は」

おっと、そんなことはどうでも良いのだ。

まだ眠っている親分を起こすために少し足を鳴らしながら、現れた厩務員にお辞儀をする。

この会釈が、彼にどう思われているのかはわからないのだが、これをすると頭を撫でもらえるので好きな行為であったりする。

むしやむしやと今日の飯を食みながら再度足を動かす。

疲れは残っていないようで、今日からでも調教に参加できるだろう。

もつとも、前回はしばらくの間、少し軽いメニューに変更されていたので、いつもの

ような調教をする必要はないだろうが。

「放牧にいくぞー」

ん、今日も今日とて散歩のようである。

眠気眼の親分を置いて、散歩に出かけるとしようと思ったのだが……。

『ふうふう』

これが失敗であつたようだ。

親分の腰巾着として常に尻を追いかけてきた私は他の馬からの認知が薄かつたのであろう。

顔も知らぬ馬たちから囲まれてわちやわちやと揉みくちやにされている。

もつとも、敵意ではなく興味の感情による馬ボールであるため、特に不快感があるわけでもないのだが。

わちやわちや

わちやわちや

わちやわちや

とはいえ暑苦しいのは事実。

成長の結果、回りを囲む若い馬たちよりは立派な体格をしている自信はあるのだが、

頼りがいのある馬というわけではないだろうに、どうしてここまで囲まれるのか。

うむうむと頭を捻っている、嗅ぎ慣れない匂いを感じる。

視線を向けると同じく見慣れない人間。

遠くにいるものだから恐れる必要はないのだろうが、若い彼らには不安なのだろう。

いや、私より若い馬などここには一頭もいないように思われるのだが……。

ならばもうしばらくこの馬ボールの中心にいるのも悪くない。

そう思い周囲の馬たちに鼻を押し当てて不安を和らげるため奮闘するのだった。



人道もわりと救えない

## 入学式は睡眠時間

真つ白でもなく、真つ黒でもなく

中途半端な灰色の髪。

望まれていた白銀の色が見えなかった時、泣き声一つ上げない赤子を見つめた時。

赤子はたった一人の母親から産まれた途端に首を折られかけた、らしい。

珍しく家でお酒を飲んでいたお父さんが泣きながら話してた。

それなりに高貴な家の出身であつた母は、実家から強いウマ娘を産むことを望まれていたらしい。

その中で走らないと有名な葦毛のウマ娘が産まれ、あろうことか。話題性すらないであらう灰色の身体の子どもが産まれたらしい。

何かが壊れた音が聞こえたらしい。

らしい、らしいと繰り返えすけども、私にとつては全部らしいのお話だもの。

残つたのは狂気に心を支配された母親と息を止めた赤子、怒号を挙げる人々。

今でこそ病院で騒がしくするなんて非常識だなと他人事のように思えるられるかも

しれないけど、当時は大変な事件であつたらしい。

私がトレセン学園に入学するという話を聞いた時、復縁の話があつた。

まあ、本格的に顔を見たこともない母親なんていないのと同じ。

どれだけこんな事情があつたから許して欲しいと乞われても、母親がいない生活は辛いと説得されても、はいそうですか、と生返事をするこゝろしかできなかった。

当然といえば当然だけど、どんなに苦いものもそれしか食べてこなかった人には、その事がわからない。

同じ様にこの母親のいない生活に辛いと思つた経験なんて知る頃には、一人で大抵のことはできるよになつていた。

そもそもトレセン学園は寮生活で比較的ずぼらな私が相部屋の人に迷惑をかけることは恐ろしいけれども、母親と顔を合わせるこゝろなんてろくにないだろうし、下心が見え見えて逆に滑稽で面白かつたのかも。

いや

私の耳がほとんど聞こえないって知つたら、バカにしたように嗤つてたっけ？

上から目線で『スポンサーになつてあげても良いのだけど』とかほざいてたから、やっぱり滑稽でバカだつたんだらうね。

まあいつか、あんなのどうでもいいし。

私としてはお父さんが独り暮らし能力の高い人だったから、家事のやり方を教われたことだけはあの母親らしき生き物に感謝してあげても良いかも。

というか私って恵まれてるよね。

家事万能で、いつも遊びに付き合ってくれて、お仕事もしっかりとこなしてくれる。

僕の考えたパーフェクトお父さんだよ、ここまでくると。

そんな人類最高峰に恵まれた私だけど、そんなお父さんと離れなくちゃいけないんだよ。

別に一人で生きていくことも難しくないだろうけど、実家から通うって話したら『ルームシェアなんて、滅多にない経験だから一度試してみたらどうだい？』って言われちゃったし、じゃあ寮生活するかとなったんだよ。

別に嫌とかじゃないんだけど、同じ部屋のウマ娘が潔癖症とかだったら耐えられる自信はないからさ。

いやまあ、最悪の場合は家事をしないどころか、全ての行動を召し使いにでもやらせてたお嬢様になるんだろうけどね。

あー、なんの話をしてたっけ？

まあいつか

それじゃあ華の女学生の通学シーンでも眺めててよ、世の中にはそれだけで喜ぶ人が

数えきれないほどいるらしいしさ。

んっ、つまんなかった？

私がお食パンを加えて遅刻ギリギリに走って学校に行くウマ娘だと思ってたのなら、その幻想は捨てた方がいいよ。

そもそも私は食パン苦手だし、甘すぎるスイーツも嫌いなんだよね。

どれだけ甘くても、高級みかんの甘さを越えたら食べれないんだよ。

だから冬場は、クリスマスケーキとかチョコレートとか作らないし、食べないで、人間をダメにする炬燵って兵器に引きこもってみかん剥いてるんだよね。

あー、引越し準備をしたかだっけ？

それはだいたい前に済ませてるよ、今学校に行ってるのは、入学式ってやつ。

毎年駆り出される三年生が大変そうなあれだね。

とはいってもトレセンって高専みたいなのに五年生だから、働くのは四年生の仕事らしいよ？

なんで五年生じゃないのかって言われたら、わかんないけど、五年生は忙しいからね。

現役でレースを走るのは四年生までなんだけど、それ以降は就職活動で大変らしい

よ。

コネ作れないと大変なんだよね。

みんながみんなニートになれるような大金をスポンサーから貰えるわけじゃないし、重賞を取れる実力があつたとしても、目立つ子じやなきやお金は貰えないらしいから。

「新入生の諸君、これから君たちは………」

んー、眠い。

無敗の三冠馬からのありがたいお言葉が授けられてるんだけど、あんまり興味がない。

なんかお堅い人に見えるんだよね。

これなら去年のカツラギエース先輩が会長の時代に行きたかったよ。

というか現役のミスターシービーに会いたかった。

私が走るきっかけをくれた先輩で、同じような走り方が得意つてのもあつて、めっちゃ尊敬してたし参考にしよつてた。

まあ、私の足に爆発的な加速力はないから、真似したらめつちや雑魚になるんだけどね。

それで、会長の話が全部終わつて良く寝たつて伸びをしたんだけど、そこを見られそ

うだったんだよね。

そしたら隣の娘が必死に隠そうとしてくれて、ああ優しいって思ったから、後のやつはちゃんと聞いてあげた。

聴きたくて、聞いているわけじゃないんだから、任意で聞くか寝るか選ばせて欲しい。頑張つて起きていたら、めっちゃ疲れたから早く寮で休みたいって思ってたんだけど、とりあえず教室に集合つてなつて、なかなか広いから迷う奴がいるかもなー、なんてことを考えてたんだけど、案の定迷つてるのがいた。

「えつと、ごめんなさい！、一年二組の教室つて……、あつ！」

「ん？、さつきぶりだね♪」

それが、入学式の時に世話になつた娘でびっくりしたけど、しつかりものなのか、抜けているのか、どっちか曖昧なその娘の名前は、『サクラチヨノオー』ちゃんとかか。

ん？、そんなことよりお前のその口調はなんだつて？

しようがないでしょうが、こっちは耳が飾りみたいなものだから相当密着しないと音が聞こえないんだよね。

だから、相手に突然抱きついてても違和感ないキャラクターに猫を被つてんだよ、なんか文句あるなら表に出てこい！、そこには誰もいないけどさ。

「えつと、その一緒に行きませんか！」

「オツケー♪、目的地はあっちだよー!」

この娘は声が大きめだからそこまで気にならないけどさ、ボソボソ話す娘だった時とか大変なんだよね。

補聴器はあるんだけど、アクセサリーに見えるタイプだから申請しないと使えないし、今日は着けてきてない。

あつ、声が大きいい娘って手を繋ぐことなら抵抗ない人が多いからそういっただけで、今は良く聞こえてないんだよ。

「憧れのウマ娘の先輩さんってどなたなんですか!？」

「んー、前会長さんと前副会長さん」

「そうなんですか!、私はマルゼンスキーさんなんですよ!」

じゃあ、なんで会話が成立してるのって質問されたら、読唇術って奴だね。

口が大きく開く娘限定だから、ろくに使えないんだけど……、五人に一人くらいには役に立つ。

というか前生徒会って面白すぎるよね。

実績で選ばれそうになってたシービー先輩がカツラギ先輩に押し付けて、泥沼の戦いが起こってた。

結果、二人とも重要なポストに入れられて、さらつと巻き込まれたギャロップダイナ

先輩が書記に入れられて……、混沌としてたよな……。

本気でキレたダイナ先輩にドロップキックされたって、シービー先輩が言っただけ？

そんなわけで色々話してると教室に着いた。

他にも迷子がいたみたいで、私たちの地味な遅刻は許された。

同室の娘がこんなタイプの人だと嬉しいな、なんて思ってるけど、たぶんチョちゃんみたいな娘は珍しいからなー。

あ、私の番か

今からあるのは自己紹介だね。

進級したら定番の行事だけど、あんまり乗り気じゃないかな。

でもまあ義務だし……。

「はいー、ラ・ジャポーンです、気軽にラジって読んでくれると嬉しいですよー」  
聴覚障害のことは隠す。

学園に来て早々に舐められるのは避けておきたい、健全な学園生活を送ることくらいは許して欲しい。

小学校の時は、先生からそれを暴露されて（悪気はなかったんだらうけど）かけっこで勝つと、他の子のは遠慮するのに、私の耳を握って引つ張ってくるクソガキどもの『聞



こえないならいらないだろ！』なんていう理屈は言えて妙だと思ったんだけど、普通に痛いんだから止めて欲しかった。

全てが終わって、いやレクリエーションの過程だよ？、さあ寮に帰ろうとすると、チヨちゃんかわざわざお喋りしに来てくれた。

何これ聖人かなって思うんだけど、その視線が足に向いているのを見ると、この娘もウマ娘なんだなと思ひ知らされた。

でもまあ、お喋りは楽しかったから、その辺はプラマイゼロってことで許しちゃう。一緒に駄弁りながら寮に向かうと、そもそも寮の場所が違うことが判明した。

ブンブンと派手に手を振る姿が可愛らしくて、こちらも腕が飛ぶほどの勢いで振り返す。

すると、あちらも尻尾と一緒に振り返す。

無限ループになりかけた時、あちらの寮長であるビゼンニシキ先輩に首根っこを捕まれて連れていかれてしまった。

さあ、新生活の始まりだ。

扉をガチャンと開く音、おお、同居人が出てきたんだなと中を覗くと

「やっぱりこれおかしいやろ！」

「私に言われてもな……」

既に二人の先客がいた……。

ふたり？

二人!?

狭い部屋に女三人

オマケに揃いも揃って葦毛

敷かれた布団は見事に三つ

私に気付いた視線は二つ

どうやら、我々特例のよう。

やっぱり、私に平穩はない。

「えーっつと、御二人の名前は？」

「うちは！」

「私は

タマモクロスや！」

オグリキャップだ」

健全な学園生活を送れるのはいつになるのか……。

見上げた空は茜色に染まって、逃げ場はないかと悟りながらも、この面倒な状況から逃げたいと、切に思うのでした。

## 偶然の出会いは必然に

「改めて言うで、うちの名前はタマモクロス、家事全般は任しときー！」

「私はオグリキャップだ、家事は……、料理なら少しできる。推薦で地方から来たがしばらくは地方のレースを走ることになると思う」

「えーと、私はラ・ジャポネっていいます！、家事全般はできるので、頼って貰えると嬉しいです！」

ちやぶ台を囲んで本格的な自己紹介を始めたんだけど、何か空気が一世代前だよね。なんで今を生きるJKたちが夕日をバックに某ウルトラ男7のワンシーンを再現してるのかな……。

そしてこの二人はこの状況にツツコミもないようだし……、オグリちゃんに至っては数分に一回のペースでお腹を鳴らしてるし……。

お父さん、私にはシエアハウス無理かも……。

「そりゃあ、うちは家事もある程度できるし、兄弟もたくさんおるから、こういうのに慣れとるってのはわかるんよ」

そんな私は先輩の愚痴を聞き中です。

「せやかて急に寮長から『ここ広いから三人部屋にするか』やで！、なんや先輩が卒業したからって横暴やろ！」

「えーと……、大変でしたよね、私たち一年の面倒を見るだけでも重労働なのに、それが二人もいるなんて……」

ビールでも飲んだの？ っつてくらい顔を真っ赤にしながら愚痴を話す先輩の姿は、茹で上がったタコみたいでなんだか面白い。

いや、人が怒ってる時に不謹慎だとは思うけどさ、関西弁を話す人からタコを連想した時点でかなりヤバかった。

でも、必死に吹き出すのを我慢するために真剣な表情をしたから、あちらさんの反応はよろしいみたい。

「ん、悪いなー、別に関係ない愚痴を聞かせてしもうて……」

「いえいえ、こちらこそ迷惑をかける側なので、こんなことでもお役に立てば光栄です」

『グー……』

まずい……、先輩の真剣なお話の最中に何をしているんだ私の胃袋！

油を差し忘れたブリキのようにギリギリと恐る恐る先輩の方を向くと

「あはは！、大人びとるかと思つたら、子供らしいところもあるやないか！腹減つてきたんやろ？、食堂に行こか」

許された！

校長先生の朝礼の時に唐突にお腹の音を鳴らしてどこかに連行された雪くんの二の舞にならずにすんだ！

そんなわけで私がいるのは食堂

食券を買うタイプの場合だったから、とりあえず別々の列に並んでそれから合流することになったんだけどさ……。

ドン

もしかしてトレセン学園って割り込みオツケーなのかな……、やたらと私の前に割り込んでくる奴がいるんだよね。

イラッとしたから軽く腹パンして声をあげさせないまま仕留めたんだけど、もしそうだったら申し訳ないことをしたなーって思ってる。

死屍累々の私の列を見て、上級生が絶句してたのを見ると、やっぱり早い者勝ちの文化が根付いているのかも。

流石は競走馬の卵たち、どんなことにもどんな相手にも負けたくないんだね。

私には良くわかんないけどさ。

そんなわけでカツ丼の食券を買おうと、おばちゃんがおまけにで目玉焼きを付けてくれるとのこと、なんだか哀れみの籠った瞳だったから、もしかしたら割り込みは新入生への歓迎の意味があるのかも？

たどり着くことができたなら、おまけをくれるけど、そうでないなら夕食にはありつけない。

なるほど、これなら新入生が食事の時間に遅れることはなくなって早く来るようになるだろう。

なかなか合理的じゃないか……。

「ん……大丈夫やったラジ？」

「いえ、特に……、でもおばちゃんから目玉焼きをおまけしてもらえましたよ」

「ならええんやけど……」

そんなことを思いながら歩いていると、タマモクロス先輩を発見。

心配そうにこちらを見つめる視線は、母親のようで、いや私に母親なんていないけど、なんだかくすぐったくなってしまう。

こほんと咳払いをして、そのまま会話を続ける。

得意な料理は何かとか、兄弟はいないのかとか、当たり障りのない会話だったけど、まともな友達があんまりない私にとってそれは至福の時間だった。

「はいー、ジャポ―ネちやくんカツ丼ができたよー!」

私の耳にも（補聴器はさつき着けたけど）聞こえるくらい大きな声で、おばちゃんのできましたコールが届く。

うどんより早いとは思わなかったなと口にするタマモクロス……、長いからタマ先輩にしよう、に急かされて、注文を取りに行くと、そこにはカツ丼に半熟の目玉焼きが乗せられているという食べ盛りのウマ娘には嬉しい一品があった。

先輩も呼ばれて、うどんと白飯のセットを取りに行つてたけど、おかず無しでそれを食べられるのかと思ひ、小皿にカツを一つと四分の一の目玉焼き置いて、あちらのお客様からごっこをしたりもした。

おばちゃんはなかなかノリがいいね。

そんな遊びをしながらもサクサクのカツ丼を頬張る。

カツ丼には大まかに分けて二つの種類があるのだけれども、これはトンカツを重視したタイプっばい。

カツ丼としての勝利かトンカツとしての勝利か、取れるのはどちらかに一つなのだ。

これはサクサクを重視してトンカツそのものへのリスペクトを感じる。

味付けそのものは決して濃くはないし、カツ丼としての存在を示している。

でも、べちやべちやした衣ではなくサクサクの衣になっていながら、肉を柔らかくし過ぎない噛み応えのあるものに仕上げているのだ。

素晴らしいの一言に尽きる。

「おおー、このトンカツもなかなかええなー！」

ふふふ、そうであろう、つと魔王ごつこと食レポはこのくらいにして、のんびり食べますかね。

「ごちそうさまでした」

食事を終わると日は暮れていて、あとは寮に帰るだけ。

今年からクラシックを走るタマ先輩は少し走り込みをしてくるこのことで、私は一人でゆっくり帰ってさっさと寝ようと考え中。

けれども何だか寂しい気もして、そこから動かず停滞中。

慣れていたはずの孤独にすら耐えられなくなっているようで、人間というものの弱さを再確認。



とはいえ、少し待てばこの孤独から解放されるかなと部屋に行く

「ん」

同居人がいた。

そういえばこの部屋は三人部屋、一人欠けてもまだ誰かいたのだった。

ただその同居人の様子が異質だった。

「カップ麺ですか……」

しつかり片付けてはいるものの、周囲に広がる匂いからしてカップ麺でも食べていた様子。

この時間だし私も運動していたら小腹が空いていた可能性はあるかもだけど、夕食後はどうなん？

いや近所のラーメン屋にウマ娘盛りとかいう面白そうなメニューがあったから、一部のウマ娘の食欲が常識を超越してることとはしってるけど、夕食後ってどうなん？

「……………えっと、その」

「別に怒ってないですよ、ただ身体に悪いので食べ過ぎは止めてくださいね」

少し膨れたお腹を隠しているオグリさんが可愛らしくて、威圧するふりをしちゃったけど、この子すごく可愛い。

というか、ゴミ箱を見るとたくさんあるカップ麺の容器を見ると……。

「もしかして、おゆはん、食べ損ねた？」

（こくり）

あの洗礼を受けたみたいだね……。

「まだお腹空いてますか？」

（……、こくり）

「うふふ、引越し祝いに美味しいニンジンを買ったんですけど、何か食べたいものはありますか？」

「コロッケ……」

「良いですよ」

こんな感じで後輩同士の助け合いを促すのも、もしかしたら目的かもね……。

まあ

タマ先輩の表情と他の新入生の反応からして……。

露骨に茸毛は侮られてるのかな？

だとしたらわざわざ三人部屋に私たちを押し込めたのもなつとくかな。

良家のお嬢様方は違うみたいだし……。

『新入生の諸君、これから君たちはこの学園で様々な経験を積んでいくだろう。この学園は努力する者全てを平等に扱う、決して努力を欠かさず……』だったっけ？

「味な真似をするじゃん、トレセン学園」

この感じだけど私たちが三人部屋なのは……

平等を謳うトレセン学園

随分と面白い真似をするじゃん

それじゃあ

偶然だけど必然のこの出会い

惜しくもないこの命なら

やっと出会えた友のため

賭けて散るのも悪くないかな

目指す壁は高ければいい

それこそ

凱旋門とかね？

## 出会うは相棒か足枷か

「模擬レースか……、ええんやないか、うちはサボってたせいでトレーナーを見つけるのに苦労したから早めに終わらせるのは正解やないやろか？」

そんなわけで思い立ったが吉日、とりあえず嘗められないような走りで何人か潰すかと考えてただけど……。

ぶつちやけトレセンの一年つてどんくらい強いんかな？、オグリちゃんと並走したときは出鱈目に強かったから、地方であるレベルなら中央とか絶対勝てないんだけど。

あつ、オグリちゃんとは結構仲良くなれたよ。

ただあれだよね、私が作ったコロッケを食べてから態度が軟化してたのは心配かな……。

なんか美味しいもの食べさせてあげるとか言ったら簡単に着いていきそうでめつちや不安……。

いや、財布を消し炭にして終わりかな……。

て、話がずれたね。

一応、食堂で見てただけけど、一部を除いてたいして鍛えてなさそうだったからたぶ

ん大丈夫なはず……、いや抜群のセンスで努力を覆してきたらどうしようもないけど。でもトレセン学園って将棋で言うところの奨励会みたいなものらしいからあり得ない話じゃない。

「あつー、おはようございませすラジちゃん！」

「ん、おはよちヨちゃん」

さて数学の授業、ぶつちやけ私はこれが苦手なんだよね。

正確には途中式を書き込むのが嫌い。

フーリングで何とかしてる私としては、それを使えないものになると一気に弱体化するから。

ん、授業は辛くないのって？

「この計算式はわかるか」

まあ、今まで会った教師陣に葦毛への差別的な思考を持つ存在はいないから大丈夫。ただこれだと、ルドルフ会長が辛いわけだ。

教師っていうのは大人だから、基本的にその行いの責任は本人に返ってくる。

だから大したことのない問題も大々的に取り上げることができるし、余程金持ちとか

権力のある人間でもなければそのことを公表することができる。

もちろん、そんなことしたらこの学園の評判に関わるだろうけど、あの会長さんがそんなことを気にしてウマ娘の良き未来を諦めるとは思えない。

そんな感じだから下手な真似をしたら教師であろうと潰せる会長としては、むしろ古臭い考えを持った教師がバカをやるのを潰してから生徒にも注意喚起して……、みたいな方法が一番良かったのだと思う。

ただここにいる先生方はまともな人ばかり。

いや、終わったあとかもしれないけど

でも現状はガキのバカみたいな喧嘩の範囲……、された側はたまったもんじゃないけど、で済まされている状態はむしろ足枷になってるわけ、か……。

派手に行動をするような奴がいたらそいつ白羽の矢にしてしまえばいいけど、嫌がらせの範囲……、なんで弱いと思ってる奴らに嫌がらせしてるんだ？

いや、楽をしたいだけかもしれないけど。

掃除当番を押し付けられたりはしたからこれが正解かもしれないけど。

合理性のある差別なんて存在しないから思考の無駄かな……、人間ってめんどくさ

……

「おいー、ジャポーンお前だぞ」

「あつ、ごめんなさい良くわからないで……」

「なら返事をしてくれ、ここはだな……」

おっと、考え事はこれが終わってからにしようか。

「大丈夫？、ラジちゃん……」

「だいじょうぶだよ！、ただ難しくてね」

「あつ！今度ヤエノさんと勉強会するんだけど、一緒にやらない！」

「いいね！」

んで、考え事の続きなんだけど、『大事』にするだけなら理不尽を無視したりしてヘイトを溜めて、んで自殺未遂でもすればどうにかなると思ってたんだけど、クラシックを控えてるタマ先輩の精神に負担をかけたくないし、目の前のかわいい友人の涙は見たくないからやりたくないね。

そんなわけで純粋な強さでなんとかするしかないこの現状は搦め手を使いにくいこの状況はあんまり好ましくないのですよ。

それでもやるしかないからね。

模擬レースの出走登録ほいつと申請しておきます。



『何だかんだで、そこまでやれたんでしようが！、ならあんたはすごい子だよ。なんでも良いから上を目指してみんしやい』

ほどほどに頑張らない

何ともいえないその信条のままに生きてきて早十六年。

普通に高校に行つて、普通に大学を出て、普通に就職でもするのかと思つてた人生が変わつたのは、中学の時だった。

つても、空から美少女が降つてきたとか、特別な力に目覚めたわけでもない。

お袋の言葉だ。

常日頃から広言してるわけでもないが、この信条は家族にもなんとなく伝わつていて。

今までは『最低限でできればいい』とか『お前が一人で生きればそれでいいんじゃないか』とか言われてた俺にとって、上を目指せつては新鮮で聞き馴染みのない言葉だった。

高校生になつても特に努力も成長もせずに進んでいたけれども、その言葉は頭から離れなくて、ふとした瞬間に今のままで良いのかつて想いが胸の中を暴れまわる。

それで俺はその想いに負けた。

いや、世の中の皆さんの意見は誘惑に勝ったなんだろうが、その時の俺は何ともいえない負けたという感覚に陥っていた。

それでまあ、必死とは言わなくても普通の努力を重ねて、普通の人間はほどほどに努力する人間になった。

その結果は特別なものではなくて、ただテストの赤点が減ったとか、評定の平均が上がったとか、そのくらいだ。

それでも先生方からは、ろくに提出物を出さない不良生徒の成績が突然上がったもんだから、職員室でも話題が挙がる程度には、大事だったらしい。

それが、ほどほどに頑張らないが、ほどほどに頑張るといふ信条に変わった時だったりする。

そんな自分が変わってからは、理由もなくいろいろと挑戦したさ、とりあえず日本一周とか、ろくに英語も話せないのにアメリカ横断とかな。

俺は努力するのは、地道で辛くて、泥臭いもんだと思っているから、そのことが楽しいと思っちゃったら努力じゃないと考えてる。

sonだから俺は結局、努力のできないダメ人間になった。  
でもよ

中学の時の俺と大学の時の俺に見せてやりたい。

「おい、俺……、今お前はトレセン学園のトレーナーやってるぞ」

そんな夢みたいな現実を

まあ、そんな夢みたいな状況になったのは、大学時代の俺のお陰だから、そこんところは感謝してるよ。

お前が理由もなく片っ端から取っていった資格だの検定だとの中に偶然「揃えるところ」で働けるような資格があったんだから……」

まあなんだ。

ウマ娘のトレーナーの資格は、一つで成立するものと、いくつかのものを集めて得られるもがあったんだよ。

ただ、寄せ集めの方はチームが作れないんだけどな、担当ウマ娘も一人しか取れないし。

そんな制度に頼るほどトレーナーは不足してるし、試験の合格は難しい。

まあ、そんなトレーナーという仕事を任せられたのは、いわゆるコネだ。

正確に言えば、友人からのSOSに应运ることなんだが、これもコネだろ。

理事長に挨拶をして、個室の鍵を貰って、んで見てこいカル口って言われて……。

それで、今は模擬レース？とやらを見てるんだが、なんとというか酷い。

いや、比較対象がうちの身内……、まあシービーとかと比べるのはおかしいんだろうが、駆け引きも殆どない運動会の駆けっこかよと言いたくなるようなレースを見せつけられたんじや、こうも言いたくなる。

二つほどそれを覗いて、ああダメだこりやつてなつてから、三つ目に光るものを感じさせる奴はいたんだが、既に担当がいた。

諦めかけた四つ目

そこにいたのは一人の灰被りシンデレラだった。

灰色の姿にジャージを着たその姿、周囲から向けられる嘲りの感情。

ああ、いかにもな奴がいるなって笑ってしまった。

ただこれのお陰で興味が湧いたから、結果的にはその目立つ……、かは微妙だが特徴的な容姿に感謝している。

そして

レースが始まった。

シンデレラは最下位、なんだ、まさかシンデレラストーリーみたいに逆転するんじゃないだろうな……。

前から距離を離され、後方をポツンと一人旅……。

周りにいるトレーナーらしき人も、そいつには視線を向けずに、かなりハイペースに進むこの馬群の先頭や周囲に期待を寄せている。

とはいえ、大したことがなさそうなのは事実だから俺はそのシンデレラを眺める。すると気付くわけだ。

「あいつ、ずつと加速してんのか……」

前から離れすぎているが故に、しっかりと確認することはできないが、確実に加速して

そして

「あはは!!、轢きやがった!」

垂れてきた奴らを一人、二人と薙ぎ倒し、上位に肉薄したところで、五着に倒れた。

1000mでやる走りじゃないし、普通に負けているが、それでも

「君!、うちの担当にならないかい!」

「いや、うちなら確実にG1を!」

めっちゃ、声がかかっている。

そりやそうか。

あと少し距離があれば全てを轢き倒していた可能性の高い実力者だ。人気にもなるし、自分で確保したくもなる。

ただ……。

「私が日本一になれると思いますか？」

「私を日本一にしてくれませんか？」

そんなバカげたことを口にするウマ娘には、若いトレーナーは応えられないだろう。

それを実現できる可能性を秘めた熟練のトレーナーは半分彼女を諦めている。

理由としては……、まあ日本に長距離のレースが少ないからだろう。

活躍させることはできても試行回数が少ないからGIを取らせることは難しい。

数合わせで有馬記念を長距離としていくくらいだから、ステイヤーの活躍しにくい日本において、彼女を取るメリットはない。

そんなら、中距離に強い馬でも育てた方が楽だろうしな。

いやでも

「海外ならいけるか……」

いや、無理だな。

俺はこいつを諦めて別の……。

おい！、なんでこつちに来る！

「担当トレーナーになってください！」

「ガラスの靴を拾った覚えはないんだがな」

「あら、シンデレラですか？、ならあなたは王子様ですかね♪」

「そこは魔女だろ……、王子様なんて柄じゃねーぞ……」

トレセン学園出社の初日……。

面倒なことになりそうだよ、母さん……。

## 大胆な告白は美少女の特権

『大胆な告白は美少女の特権』

その輝きだけで全てを満たすような美少女ならば、ロマンチックな告白でなくとも成功するという意味合いの言葉なのだが、俺は今、それを激しく実感している。

「それで、王子様、返事はどうでしょうか？」

先のレースのシンデレラ

惜しくも敗北に沈みながらも圧倒的な存在感を示した彼女は、なるほど前述の言葉に十分に当てはまる美少女。

そしてここで断られるとは微塵も思っていないであろう輝きに満ちた瞳の奥……、面倒事の匂いがこれでもかというほどに漂ってくる。

とか目か目の前にいる冴えない男を迷いなく王子様と語るこいつと仲良くできる自信はないんだから、こいつを上手く導く手段も思い付かない。

だが、我々のような根底が陰の者たちは基本的に女の子の言葉を断れない。

それが目が覚めるような美少女ならば尚更断ることはできない。



それは、アメリカ横断の旅ではつきりしている。  
だから俺は……

「少し考えさせてくれ……」

「良いお返事を期待していますね♪」  
話を先延ばしにした。

ああ、笑ってくれ

きつと俺の同士たちは『美少女の願いを断るなんて！』と怒りの咆哮を響かせている  
だろうが、これでもトレーナーになったという自覚はある。

だからこそ、俺みたいな経験のない人間にこれを任せろべきかと言われたら違うだろ  
……、と思う。

いや、正確には先延ばしだからこれから何が起こるかはわからない、でも答えは見え  
ているようなもんだな……。

半ば逃げられないことを悟りながら、貰った個室の鍵をもて余すのだった。

はい、ジャポーンです。

申請していたレースは、想像よりもずっとレベルが低かった。

いや、勝てなかったのだからそんなことを言う資格があるのかという話だけど、模擬

レースは1000m。

1500mを超えてからじゃないと十分な加速ができない私に抜かれた子たちは正直今後が大変だと思うかな……。

おっと、そんなことどうでも良かった。

なんと

トレーナーらしき人と約束できたのですよ。

別に特別なことでもないし、確約でもないから大袈裟に喜ぶことのは何か違うんだけど。

でも、スツゴい嬉しい

遠くにある醤油ラーメン屋さんが地元に出店した時の喜びと同じくらい嬉しい。

あの人が良くて強いタマ先輩ですら苦戦したスカウト（逆だけど）を半分くらい成功したんだから嬉しいなんてものじゃないかも。

そんな喜びに震えながら、軽くトレーニングをしていると、何やら視線がピカリ。

不思議に思って振り向いた先にいたのは

「んー？、どうかしたのオグリちゃん？」

相部屋の大食漢……いや大食乙女のオグリちゃん。

同じく模擬レースを走っていたのか体操服を纏っている彼女は、ほんのりと蒸気が立

ち上っていて、満足そうな表情をしてる……。いや違うかもなんかものすごい音が鳴ってるし普通に飢えてるかも。

目を合わせると恥ずかしそうにお腹を擦るポーズをみると、やっぱり空腹の様子。

夕焼け沈む黒い空

軽やかに行く食堂の道

いつもは重たい歩みでも

二人で行けば白い道

いつかの平和な未来のために

今は手を取りとことこと

「ん、着いたかな」

「ああ、それじゃあ」

「うん、頑張ってたね！」

食堂は戦場

誰が言ったかもわからないその言葉は実的に射ていと思されるよ、ほんと

初日は洗礼を喰らった私たちも、数日すれば立派な同士として認められたのかも……。

そんな希望的観測を抱きながらも、テキパキと食券を買って、今日の夕食を確保。

怯えるような、警戒するような視線は、もう何年も前に愉悦の感情へと変換されるようになって、心配するような友人の視線にダメージを受けている自分に心も屈折したんだなーとちよつとシヨック。

「ラジは何にしたんだ？」

「鯖かな」

やっぱりそこまで心配していない雰囲気の友達と肩を並べて席に着く。

周りにいたはずの人は少しだけ消えて、都合がいいなと笑いながら窮屈なくらいに肩を寄せて隣のお茶碗を覗く。

「オグリちゃんは何で食べてるの？」

「？」

比喩抜きで山のように積まれたご飯をどうやって消費してるのかを尋ねながら、自分の定食をつつくことにする。

もしかして私の周囲のウマ娘って少食だったのかなと、あぁご飯三杯で音をあげるよ

うじゃ強くなれないのかなど、見るだけでお腹が膨れるようなスピードでご飯を吸い込んでゆく姿は恐ろしいけど……、あのレベルじゃないとG1を取るのは無理なものも。

よし

「おばちゃん、おかわり！」

走れば消えるよね……。

「ん、二人とも随分と速いなー」

「ん、タマか」

「その早いつてもしかして……」

いつの間にか揃っていた同室組は、少しガランとした食堂に明るさを取り戻す。

それが全てを照らす太陽か、忌々しい紫外線かはそこにいる彼女たちにしかわからないだろうけど。

「ふー、なかなか美味しかったです」

「せやな、しょうが焼きがあんなに奥の深いもんやとは思わなかったわ」

「タマも作れるのか？」

「あのレベルは無理やな」

「私も無理だねー」

和やかに歩く帰り道

干した布団を取り込んで

川の字になり眠るのでした。

間が悪かった

言い訳をするつもりはないが、本当にこの言葉に尽きる。

生徒会長『シンポリルドルフ』は、今年入学してきた『ラ・ジャポ―ネ』というウマ娘が引き起こした事件に頭を抱えている。

かなり顔の知られたトレセン学園の出資者の子供さんでありながら、その存在を認知されなかった彼女はお嬢様と呼べるような御淑やかな姿を見せないマイペースの極みのような生徒だった。

そして割り込みをした生徒に暴力を振るう程度には好戦的なウマ娘だった……。

それだけなら良かった……。

ああ、良くはないがまだ良かった。

しかし

「よりにもよって今か……」

彼女が学園の上層部と協議していた一部ウマ娘への半ば合法化された差別行為の改善のための校則案の検討。

いや、集団での行為は一人一人の力が教師に相談できない程度に弱くとも積もり積もって心を蝕んでゆくものだから、即効性のある改善策と呼べるかは微妙だが、それでも可視化された法に抗ってまでその行いを続けるような恨みがその一部に集められることはない……。

はずだった

今年の推薦によってここに来た『オグリキャップ』、新馬戦を終えて新たな可能性を探っている『タマモクロス』、素晴らしい実力のウマ娘も揃っている以上、実力という点で侮られることも減ってゆく……。

はずだった

だが

彼女は葦毛だった。

そして

自分たちの押し付けた理不尽を棚上げにしてはいるのだが  
悪意を向ける正当な理由を持つ相手だった。

そして先に挙げたウマ娘たちは見事に彼女の同室でいつも一緒にいる。

もう少し遅ければ……

キリキリと痛む胃に薬を流しながら、今後を憂っていると扉を叩く音

「入ってくれ」

彼に何とかできるだろうか……。

叩かれたドアの外にいる『彼』のことを思いながらため息を吐くのだった。



## 契約成立は断れない

『入ってくれ』

唐突に呼び出された先は執務室。

今年の生徒会長である『シンボルドルフ』が半ば住んでいるというこの場所。

始めて聞いた時は寮にも帰れないなんて不憫だなと思っていたのだが、自分がこうして呼び出されてみるとその同情も消え去る。

何が悲しくて胃がキリキリと痛むような緊張の中に放り込まれるような場所で、あの生徒会長の話を聞かなくてはならないのか、もつと生徒指導室のような暖かい場所です。やっていいんじゃないかと不満を吐き出す。

もつとも解雇の通達なら彼女から直接話をする必要もないのだから仕事を失う心配はないのだろうが、この場を設ける必要があるような問題となるとあの時のことしか考えられない。

「失礼します」

「ああ、そこに掛けてくれ」

始めて近くで見たシンボリルドルフは、ああ、確かに三冠馬の貫禄を認めることができる。

ただ、その威圧感も少し衰えた目元と明らかな疲労感を持ったその雰囲気でも少薄れているようだ。

「今回呼び出した件なんだが……」

休憩もそこそこに本題が始まった。

「昼の模擬レースで君に接触したウマ娘がいるだろうが……、彼女が君を逆スカウトしたという話は本当だろうか？」

「はい……」

やはり察していた通りのあれだ。

ぐだぐだと前置きをしてから話を切り出さないとところを見ると、やはり疲労、そして単純に時間がないのだろう。

「彼女のスカウトを受けてはくれないだろうか」

スカウトの強制は、相手の自由を阻害するということもあってお偉いさんに囲まれて半ば強制的に行われるものだと思っていたのだが、裂ける人材も少ない……、もしくは臨時トレーナー一人なんてどうともなると思っているのか。

とはいえ、ここで働かせてもらえないとまともに飯を食べるための金もない。

なら

「二つだけいいですか？」

一つだけ聴くとしよう。

「何だ？、余程のことでない限り叶えてやれると思うが」

「大したことじゃないですよ」

あの全てを抜き去らんとする豪脚

それに魅せられた

あの中途半端に被った猫の皮

それに腹が立った

あの全てを諦めたように灰色の瞳

それに見せてやりたくなった

「ああ、言ってくれ」

なら

あれだけの感情をくれた相手なら

「クラシックの一部が終わったら海外に行かせてもらえませんか？」

外の世界ってやつを見せてやりたいんだ。

「つまり……」

「ええ、彼女が日本で最も活躍できるレースを放棄します」

目の前の皇帝が彼女のことをどれだけ理解しているのかはわからない。

「本人の意識は確認してくれ……、私から言えるのはそれだけだ……」

「その辺は本人から確認済みです」

怪我によつてそれを諦めた彼女にこの言葉をかけるのは残酷なことかもしれない。

それでも

「取りますよ」

「おそらく君の願いというものは不可能だ……」

「なら勝手にやりますよ」

「海外が強いというわけでも、私たちが遅いというわけでもない」

「知ってますよ」

「あまりにもレース場の質が違ふ……」

「そうですね」

「君の目指すであろう金色の冠は、あの門は……、並大抵の覚悟では越えられない、潜ることも許されない」

知っているが故にその壁の高さを理解できるのだろう。

「わかってい

「だがな『全てのウマ娘を幸せに』これが私の願いであり信条だ。

まだ実績も見せていない者が口にしたとは思えない大言壮語であろう通してやる。捕らぬ狸の皮算用にならないければいいな？

もつとも、その皮になる程度の覚悟は決めてもらわないと困るぞ？」

あはは、重々身に沁みて……」

今日の練習風景を見せてもらったが、あいつの走りを全て理解したつもりはないが、

それでも、夢を見るには十分な走りだった。

故にこの啖呵を切ったつもりだったが何とかなったようである。

疲労で倒れかけの皇帝を獅子のごとき圧倒的な覇気を放つやる気の状態にしたのは誤算だったが……。

「ふむ……」

ほら、なんかカレンダーを確認し始めたし……、あつ、予定書き込んでるんだけど……。

「こりゃあ、ほどほどじゃ無理だな……」

ちよいと大変な三年間になりそうだ。

窓から見えた模擬レースにいる怪物たちが夢を阻んだとしても

たとえ逃げたと嗤われようと

「成し遂げないと終わりだな」

勝手に決めて勝手に作ったこの夢

随分と楽しいことになりそうだ。

私、ラ・ジャポーンが逆スカウトをしたレースから三日後のことだったかな？、いや

正式にトレーナー契約を貰ったのは五日後。

例のトレーナーらしいき人は、当たり前だけど、やっぱりトレーナーだったらしい。いや、らしいじゃなくて本当にそうだけだったけど。

まあ、そのトレーナーさんと真剣なお話をした。

そんなこと言われても良くわからないだろうから、少しだけ過去に戻ろつか。

それじゃ

ぽんつと

「疲れたなー」

思い立ったが吉日と始めた模擬レースの後、わりと初めてかもしれない真面目なトレーニングをやってる。

この前はレースで気が強くなってたから『私に抜かれた娘は酷い』みたいなことを考えてたし、なんか良くわからないくらいスカウトを貰って舞い上がってたけど、冷静になれば普通に負けてるし、三馬身の差での大敗だったから全然良くなかった。

もし1000mとかいうハンデがあつたとしても、あの程度の相手なら圧倒的に勝たないとG1は絶対に勝てない。

そんな考えと共にやはり思い立つは吉日。



個人で調べながら練習の予定を立ててみたんだけど、これは結構楽しい。

予定を立てるのは嫌いだったし、誰かから課せられるノルマなんて大嫌いだったけど食わず嫌いするのはやっぱり食べてみないとわからないと思う。

とはいってもトレーニングの予定を立てるなんて自分の客観視ができてないと成立しないんだから自分で作るのは間違いないわけだ。

結局、やっぱりトレーナーが欲しいなーに落ち着くんだよね。

あの保留トレーナーさんが逃げないことを祈っておくでしょう。

ぐうー

まあ、何があろうと腹は減る。

今日は運動をしただけあっていつもよりずっと早い空腹時間。

こうなると私は秋ごろの熊より気性が荒くなる。

日替わり定食のメニューがお米にびったりなものになった時は空腹のシヤチより攻撃力が上がる。

まあ、今日の定食はニラ玉がメインだったからスルーしたんだけど。

乙女に口臭の原因になるものを食べさせようとはなんてことだ！、って感じ。

いや、ニンニクがたくさん入った八宝菜が好きなら私がそんなことを言っても説得力ないけどね。

ん、今日は食レポとか食堂ドラマとかないよ。  
一人寂しく夕食をもぐもぐしてたからね。

「ただいまですー！」  
とりあえずの帰宅。

今日は皆さん忙しいようで、部屋には誰もいなかったんだけど、最近毎日のように言うようになった『ただいま』に返ってくる言葉がないとなると、少し寂しかったり。

まあ、すぐに自主練行くと伝えているし、今日は遅くまで誰もいないんだろうけどね。  
トコトコと歩く先。

深夜にも関わらずトレーナーとウマ娘の群れ。

貸し切りになるかも思ってたけど、そんなに甘くはないみたい。

それでも一部のコースはガラガラで、別に距離が欲しいわけでも、砂でも、芝でもどっちでも良かったから自主練に支障があるわけでもない。

んじゃ始めよつか……。

「やっぱりお嬢様は頭がおかしいな……」

世の中のお嬢様を敵に回すような言葉を口にしたのは、この前のシンデレラがトレーニングをしている姿を目的したからだ。

いろいろと聞きたいことがあったからありがたいことだが、運命とかいう恐ろしいものに引き寄せられているような、自分の意志を操作されているような感覚に襲われる。

さて、件の灰色のお嬢様は、そのドレスを脱ぎ捨てて野暮ったいジャージに身を包んでいる。

もともと、庶民的なお嬢様だったというわけだろうが。

そんな彼女はインターバル走を繰り返している。

ざつと二時間ほど……。

多くのウマ娘が食堂に走ってから、食べて終えるまでの時間、全くの休憩をせずに走り続けている。

不思議な加速をしているとは思ったが、スタミナもイカれるとなると本格的に長距離の身体をしている。

おもしろい身体をしている。

そんなおもしろいお嬢様は少し息を整えた後、静かにこちらを向いた。

「ん……、なんですか……！」

間違いなくこちらを認識した彼女は、嬉しそうに手を振ってきた。

とりあえず手を振り返しながら、ゆっくりと歩き始める。美しい姿をしたお嬢様は、汗水を垂らして働いた灰被りのように疲れた表情をしている。

「もしかしてスカウトのお答えを貰えるのでしょうか？」

その疲れた表情を顔から消して、幸せに天真爛漫なお嬢様を演じる。

こうもひつくり返るように雰囲気を変えようと、まるでカメレオンのようだ。

「いや、お前さんが俺をスカウトした理由を聞きたくて探してたんだよ」

「うふふ、ガラスの靴が収まるかどうかを知りたいんですね？」

この様子からすると、こちらが興味を持っていることを理解しているようだ。

いや、こんな時間にこの場所を探している時点でバレバレか……、まあ、この前のせいで俺が詩的な表現が好き人間だと思っっているのかもしれないし、ちょうど満月のこの夜を自分で選んだと睨んでいる可能性もある。

そんな彼女が自分を選んだ理由。

何となく察してはいるそれを聞きたくてここにいます。

「私がトレーナーさんをスカウトした理由は単純ですよ？」

「もしかして……」

「はい、私のことを海外に挑戦させてくれるんですよね？」

やっぱり……。

どうやら凄まじく耳が良いようだ。

大海へ旅立つことに憧れがあるのか、何かしらの勝算があるのか。

いや、わかりきってはいるが。

「二応、聞いておくが何か理由はあるのか？、お前さんの足なら天皇賞レベルの長距離なら取れるだろ」

「本気で言ってるんですか？」

まずいな……、ギャルゲーというパッドコミュニケーションンってやつだ。

とはいえ、それを聞かないといういろいろと始められない。

「二応と言っただろうが……、ただ理由だけは教えてくれ」

「理由ですか……？」

「ああ、理由だ」

理由かー？

正直に言えばそんなものはない。

一つあるとしたら現状の破壊だけど、そんなものは今の私にはあんまり関係ない。

友達もいるし、世代のライバルもいるこの生活。

何か気持ちの悪い奴らがいること以外は、順風満帆な学園生活を送れている。  
わざわざ海外を目指す理由はない。

「トレーナーさん」

「なんだ？」

「ひとつおかしなことを言ってもいいですか？」

「いいぞ」

「実はですね」

「ああ」

「海外を目指す理由はですね」

「ああ」

「実はですね」

「ああ」

「ないんですよ」

たぶん幻滅される。

見たところ熱血トレーナーには見えないけど選択肢に海外がある辺り、上を目指すウマ娘を応援するタイプのトレーナーだね。

なら

「そうか」

「ふえ？」

おかしい

この人おかし……。

「それでだな、仮担当」

「はい」

「俺もひとつ良いか？」

「はい」

「少し考えさせるような内容だな」

「はい」

「それでいて普遍的な内容だな」

「はい」

「ひとつだけだからな」

「引っ張り過ぎです」

「ああ、いくぞ」

「お前の夢は何だ？」

それによってお前の未来を考える。

その言葉は少し前に聞き慣れたはずなのに、自然と耳に残った。



## 夢というもの

『「お前の夢は何だ？」』

言い回しは違っても腐るほど聞いてきた言葉。

そんなものがないと生きちゃいけないのかと思いつながら適当な言葉を口にしてきた。  
嫌に耳の中に残るその言葉。

『野球選手です』 は？

『アイドルです』 は？

『プログラマーです』 は？

大人は子供の夢を応援しているけれど、同時に現実の厳しさというものを痛いほど知っている。

『中学の先生です』 うん！

『銀行員です』 うん！

『プログラマーです』 うん？

もしそれが望まぬ結果であったとしても、幸せな未来を進んで欲しいと願っている。

『君の夢はなんだい？』

『……………』

小さな頃の夢は『素敵』なお嫁さんだった。

お母さんには会ったことはなかったけど、友達の家で見たそれは、優しく、でもちよつと厳しくて、とにかくそれが欲しかった。

それが手に入らないことは何となくわかってたから、自分がそれになろうと思ってた。

ただ1つの『おかえり』が欲しかった。

今となってはただの想い出だけ。

その次の夢は何だったっけ…………。

ああ、バスガイドさんだった。

お父さんはいつも遊んでくれたけど、私を遠くまで連れていってくれるだけの余裕はなかったみたい。

だから、他の家の子が旅行に行く話を聞いたり時に、いろいろな場所を歩んで見たかった。

その次の夢はなんだっただろうか……。

いや

その時からだっけ？

『夢』なんてものを羨ましいと思ったのは……。

『「ありません」』

『「これから見つけてしまえばいい」』

ほとんどの答えはそれだった。

真剣に悩んでる問題を先送り、先送り、先送り

もちろんそれは正解だと思う。

誰かに決められた道を『夢』だと思って歩くのは疲れるし、やる気も続かない。それでも、私には『道』が欲しかった。

一人で歩く足はあると。

もちろん他の人より不自由で不器用な身体だけど、決して立ち止まるだけじゃないと。

そう言つて叫びたかった。

でも

一緒に探してくれる人はいなくて、歩くだけで邪魔だと思われるような道を辿つてきて……。

だから私は決めただ。

『G1に勝ちたいです!』

綺麗なお面を被って

『委員長やります!』

綺麗な正解を纏って

『大丈夫ですか!?!』

綺麗な『私』を作って

自分を失くせば

被っていたはずのこれが顔に貼り付いて取れなくなってしまうば

『私』と一緒に探してくれる人も、『私』の道に踏み込んでくれる人も見つかるはずだと……。

でも『自分』は強くて

『あの娘、調子乗ってない？』  
少しの悪意も

『なんであんたみたいな奴が……』  
少しの嫉妬も

『余計なお世話なんだよ』  
少しの理不尽も

許してあげられなかった。

『レースが始まったら、そこはアタシたちの世界、でしょ？』  
本格的にトレセン学園を目指すようになった。

始めの道は想像よりも優しかった。

この『私』を捨てようと思った。

やっとスタートラインに立てたと思ってた。

一緒に遊んで

一緒に切磋琢磨して

一緒に泣いて

一緒にお腹いっぱいになって

一緒に『ただいま』を言える。

そんな友達が手に入ると思ってた。

でも

解き放たれた『自分』は邪魔で

相変わらず『私』が必要で

『自分』も『私』も邪魔で

別の『私』が必要で

欲しいものが手に入っても消えなくて

だから

消えてなくなれば良いのにつて

消えたいのに『夢』なんて……。



「『夢なんてものはありませんよ』」

いつもみたいに当たり障りのないことを言えばいいのに口は止まってくれない。

「『会長のような大義もなく、その場の勢いだけで大言壮語を口にして、才能もないのに無駄にプライドが高くて、欲しいもの全てがあるはずなのにこの場所にいることが嫌で、何を望んでいるわけでもないのに歩きたいと願っているんです……』」

「幻滅しましたか？、トレーナーさん」

私は何がしたいんだろうか……。

今度こそ終わりかな。

少しだけ閉じた瞳によって世界を黒く染める。

これで何も見えないし、何も聞こえない。

どれだけ怖くても大丈夫。

『いや、全然』

え……………。

なんで……………？

「むしろ海外行くなって言っただにしている普通の思考回路で安心したよ」

「なんで……………？」

「ん？、ただ質問を変えるぞ」

なんで……………。

全てを失ったはずの世界で

私の吐き出す息の音以外を失くした世界で

ポツンとーつ響く音。

「お前は何が好きなんだ？」

「なんで……」

「質問の意図か？」

貴方の音は消えてくれない。

瞑った瞳には何も映らないのに、貴方の音は耳から離れない。

「何もできないなら、できることからって言うだろ？、トレセン学園はレースをするウマ娘にとっても最高の場所だが、それ以外でも三番目くらいの場所だからな」

でも

貴方に、道を探せと言って欲しくない。

「わかんないです、夢の形も、好きなものも、だから大嫌いです」

だから突き放す。

貴方は目を伏せる。

そして

「少しだけ昔話をするか……」

そのまま語り始めた。

昔、太平洋をヨットで渡った人間がいた。

昔つて言つてもその時には大型のフェリーや飛行機が既にあつた。

だけど人間はたった一艘のヨットで大海原を渡つたんだよ。

確かにそれは偉業だ。

でも、冷静になれば非効率的で、満足感以外に何も無い行いだつた。

昔、世界で一番高い山に登った人間がいた。

それまで複数の調査隊を前提とするような危険な山を一人で登りきつたんだよ。

それは確かな偉業だ。

でもさつき言つたように登るだけなら複数の調査隊がいれば良いつていうオチもある。

たった一人で成し遂げたはずの偉業は冷静になればただ命を危険に晒しただけの無意味な行いだつた。

なんだったたら嗤われてもおかしくないかもな……。

その偉業は教科書には乗らないし、彼らの伝記を手取る人間はたくさんいても後に続こうと願う奴なんてほんの一握りだろうな……。

でもよ

『かっけえ……！』

憧れたガキがいた。

そのガキは本気でなろうとしたのさ

『冒険家』って職業に

「羨ましい……」

純粹な、故に狂気的な言葉を呟く。

「重症だな、流石に止めてくれ……」

まあ、そのガキは冒険家になるために何が必要かを考えて、英語を覚えるとか、身体を鍛えるとかじゃなくて、とにかくいろいろな場所を歩くことだった。

あはは、一人で隣町まで歩いたり、県を跨いだりして叱られたっけな。まあそんなことはどうでも良くてな。

とりあえず、ガキは冒険家を目指したってことだけ理解してくれればいいよ。

本気で冒険家になろうとした。

中学に進学した。

結果、ガキは少年になって諦めを覚えた。

『本気で言ってるのか？』ってな。

バカにされるとか嗤われるとかじゃなくて心配されたのさ。

本気でそれになれると思ってるのかってな。

少年がそれで奮起できるなら本当に冒険家になれたかもしれないが、少年は諦めた。

それからは普通に

死なない程度に生きればいいと思ったのさ

ほどほどに頑張らないってな。

そっからはそうだな。

『何だかんだで、そこまでやれたんでしようが！、ならあんたはすごい子だよ。なんでも良いから上を目指してみんしゃい』

やる気がない俺の気分は山の天気のようにコロコロと変わったんだよ。

それからほとりあえず何でもやった。

目の前にいる男がエベレストを登頂したって言ったら信じるか？

線路とバスで世界一周したって言ったら信じるか？



「トレーナーになったって言ったなら信じるか？」

「わかんない、でも最後だけ規模が小さい」

「そこは嘘でも信じとけ、あとトレーナーになるのは意外と大変なんだよ」

だからな

「とりあえずやってみろ」

「何を……」

「んー、海外だろ？、じゃあ凱旋門とかどうだ？」

「ん！」

「響いたか？」

「いや、少し前に思ってたの、凱旋門が取れたらみんな私たちを認めてくれるかなって」

「おうよ、いけるぜ」

「じゃあね、凱旋門が欲しい」

「ちよつと重たいがな」

「物理的にじゃないよ？」

「わーってるよ」

「そしてね」

「何だ？」

「トレーナーが欲しい、夢も欲しい、この無駄な誇りに見合う強さが欲しい、大言壮語を事実に行ける覚悟が欲しい、欲しいものが欲しい」

「努力次第……、とは言わねえよ、全部叶える道は整えてやる」

だから

「走れよ？」

「わかった」

それじゃ、契約成立だ。

「よろしく頼むぞ担当ウマ娘、見せてやるから、魅せてくれ」

「よろしく、担当トレーナー、辿っていくから、見せてあげる」

## 勉強会はサボる口実

「おお、良かったやないか！」

自分のことのように喜んでくれるタマ先輩の笑顔に癒されつつ、カレンダー片手ににらめっこ。

どうしてこんなことになったのかと言われれば、昨日の夜のこと。

自分で組み立てていた練習の予定は、トレーナーの登場で白紙に戻されて、インターバル走を明らかに無茶だと心配されて休みをもらってしまった。

すぐにトレーニングしよう！、とトレーナーに訴えたのはいいけれども、こっちも忙しいとのことで、強制的にお休みをさせられたのでした。

「ん、おかえり……」

そんな何ともいえない感情のまま部屋に戻ると、少し眠そうな声での『おかえり』が聞こえた。

気付くと時計の針は門限をとつくに過ぎていた。

もちろん、申請しているので説教を受けることはないけど、態々起きていてくれたのかと申し訳なく思う。

しかし、三人ともベッドは肌に合わないという性分なもので、川の字に敷かれた布団は、二つとも膨らんでいて、眠るのは私だけとなっている状況だった。

不思議に思つて布団を注視すると、むにやむにやと口を動かしていたタマ先輩。

ああ、眠りながらもこうやって帰ってきた同居人を迎えてくれたのだなと嬉しくなり、その柔らかい頬を少しだけつついてしまった。

翌朝、冒頭の光景に戻る。

正式にトレーナー契約が成立した。

朝食の前に、そんなことを口にしたのは、この喜びを共有したかったのか、自慢をしたいという子供のような心からか……。

結果として二人からは祝福の言葉をもらったのだけでも、何だか恥ずかしくなってしまう。瞳を閉じてしまう。

少しだけ盛り上がった朝食は、みんなそれぞれの秘蔵っ子を取り出して半ばパーティーになつた。

そして、そのまま空いてしまった予定の話もできないで、それぞれ部屋を離れたので

した。

「えつとね、ラジちゃん、明日って空いてるかな？」

そんな日だったから、代わり映えのない授業が終わった後、チヨちゃんから話しかけられたのは幸運だったと思う。

なんだかんだで勉強会の誘いを断ってきたものだから誘ってくれないようになるかもしれないと肝を冷やしていたけど、こんな私を友達と認めてくれる彼女はとびきりお人好しだ。

そんな彼女の友達というと、同じ様にとびきりお人好しなんだろう。

もちろん美浦寮の誰かだろうから、直接的な接点もないし、顔を合わせて何を言われるかはわからないけど。

着替えるのが面倒だったから教科書と財布の入った鞆と制服の上に羽織るパーカーだけ着てから寮を出る。

これでおしゃれ番長とかが来たら、強制的に服屋に連れていかれるんだろうなっていうクソダサファッションは第一印象を悪くすること受け合いだろう。

まあこれは後から思ったこと。

寮の仲間以外と外出なんて一度もないんだから、かなり気が緩んでいるし、正解なん

て知らないんだから許してほしい。

『ラジちゃん、準備できた?』

コンコンとノックの音。

想像の三倍のスピードでされたノックに驚きながら、早すぎる準備に何か恐ろしいものを感じつつ、扉を開く。

すると尻尾を幻視するような明るい雰囲気を纏った制服姿のウマ娘が、目の前にいる。

サクラ色の瞳に吸い込まれそうになりながら、寮から出ると見るからに鍛えているといわんばかりに発達した足を見せる少女の姿もあった。

「お待たせ……」

私と君が別れて十分も経ってないよと視線で抗議する。

後ろにいる彼女も同じ気持ちなのだろう、少しの抗議と七割の同情の籠った瞳で、チヨちゃんを見つめる。

ただ残念、たぶん私が初めて誘いを受けてくれたのが幸せなんだろう、今の彼女に人間の言葉は通用しないようだ。

ならば、ワンと吠えてみるのも悪くないが、それをやるとただでさえクソダサファツシヨンの印象が、唐突に吠え始めるヤバイやつにグレードアップする。

もちろん、上がるのは不審者レベルであるから上がるのは幸せなことではないだろう。

だから特別何をするまでもなく、後ろを着いていくことにした。

「えっと、申し訳ありません……」

そう頭を下げるのは、準備が足りなかったのだろう、私と同じ様にぶかつとしたジャージを着た少女である。

今は夏前なのだからそんなものを着て大丈夫なのかと不安になったが、後から聞くと稽古の一貫とのことだ。

理由は何もわからなかったが、不思議な人であることだけはわかった。

「こっちこそ変に誘いを受けちゃってごめんね……」

初対面であるのに気が合うように感じるのはきつと私だけじゃないはず。

もつとも彼女も修行のために厚手の服を着るという良くわからない方のようだが。

「いえ……、その、名前を教えて、あ、私はヤエノムテキです」

「えーと、私はラ・ジャポネって言います！、長い縁になりそうですし、よろしくね」



明るい彼女に振り回されてきたのだろう。



ほんのり疲れの見えるヤエノさん、その原因は眼前にいるサクラ色な彼女に他ない……はず。

まあ、先頭を進む彼女にその思いは届かないのだろうけど。

「何を食べよつか？」

勉強会の場所はファミレス。

学校の図書館でも悪くないんだろうけど、何だかんだ喋りながらやれた方が楽しい、らしい。

詳しくは不明。

とりあえず注文すべきかと思つて取り出したメニュー表は、定番のフライドポテトから、変わり種のかゲソなんかもあった。

誰も疑問に思っていないようだから、もしかしたらいかゲソはファミレスの定番のひとつなのではないか、なんてことを考える。

「みんなで食べれるものがないですよね？、それなら……」

「ポテトか唐揚げでしょうか、それとドリンクバーは皆さん頼みますよね」

「うん！」♪

サクサク決まっていく注文に、ピンポンと鳴らす呼び鈴。

ファミレスの効果音は想像よりも明るくて、口が回りやすい雰囲気を出している。

「それじゃあドリンクバーにいきましょう！」

「あ、私は待つておきます」

「ごめんねー」

声こそ明るいものの、皆、本来ならわちやわちやと動くはずの尻尾が小腹の空いたお腹を示しているようにしよぼんとしている。

まあ、ドリンクバーを注ぎ始めてからすぐに横振りの動きに切り替わったのを見るとあんまりにも自分があんまりにも現金な生き物だなど思わされるのだけ。

注がれたオレンジジュースは同時に入っていた謎の液体で薄められて……、はないよ。

始めに入れた氷の方がよっぽど薄める力を持っている。

さて、注文したメニューが届く前から、ガサゴソと鞆を探す三人。

それぞれ取り出した教科書がバラバラな点を除けば、最高のスタートダッシュが決められたのだろうけど、ウマ娘も十人十色。

得意な教科書は違うし、そもそもその成績も違う。

比較的万能型の私でも数学は好きになれないし、隣にいるヤエノさんも文系とのこと。

そして目の前にいるチヨちゃんの得意教科は見事に文系。  
そう。

数学を教えられない人がいない!!!  
のでした。

そのせいで、ストイックなヤエノさんは数学。

みんなと話したいのであろうチヨちゃんは理科。

私が逃げの社会。

バラバラの教科をバラバラに始めることになりそうな状況下。

「えっと、折角の勉強会だしみんなで同じ教科をしない……」

まあ、私が言わなくてもこうなっただだろうけど、一応ね。

困んで食べるご飯も、話題が合わなくちゃ美味しくない、最近知ったことだからさ。

それならそうしようよかと、再度ガサガサ。

三人で取り出したのは初日にある古典。

といつても何を勉強すればいいのかわからないこれ、うんうんと頭を捻っている間に  
取り出したりまずは単語帳。

こつこつと作っていた渾身の単語帳は、タマ先輩のアドバイスの賜物。

とんとんと読み上げを繰り返すと薄いノートは唐揚げを半分にする頃に閉じられる。

となると次は何をするかと考える。

なら社会でもやろうかとペンを取る。

しかし、若い娘が揃ったならば……。

摘ままれる唐揚げ、減っていくポテト、弾む会話、消えていく教科書。  
おしゃべりタイムの始まりだろう。

「金剛八重垣流……、良くわからないけど空手？ 的なやつかな？」

「いえ、空手というよりは徒手武術ですね、足は使わないものです」

「えっ、それでその太股!?!」

「好きな食べ物か……、ソースをかけて美味しいものかな」

「たこ焼きとかでしょうか？」

「え、そこは好み焼きじゃないの!?!」

「今度演舞を披露しましょうか」

「え、見たいです！」

「わかる、すごく気になる」

そして

「だからタービーを取ります」

ウマ娘という生き物は、ただ喧しいだけ乙女ではなく競争を愛する存在だと思い知らせるような覇気で私を見つめるのは穏やかなはずのサクラ色。

「マルゼンスキーさんが一番強いですよ」

「は？、シービー先輩が一番でしょ？」

それは、尊敬する人から、推しウマ娘議論という不毛な争いが始まったことに起因する。

「マルゼンスキー先輩とか古いでしょ？、何年前の話だっけ？」

「なっ！、それを言ったらシービーさんは前世代のルドルフ先輩に！」

「は？、それ以上は禁句だよ喰われたくないけど」

「シービーさんは確かにすごいです、でもマルゼンスキーの方がもっとすごいで

す！」

「無敗は強くとも三冠には及ばないでしょ」

『趣旨とは違うかもしれませんが私は祖父を尊敬していますね』

そんなことを語っていたヤエノムテキは、二人の熱量に恐怖している。

取り繕う明るい空気を消したラ・ジャポネのインパクトに、凄まじい熱量で応じるチヨノオー。

「さんか！、ダービーは出れさえすればマルゼンスキーさんが勝っていたんですよ！」

「さて、どうだったかね？、ダービーは運とも言うし、それを得られなかったのならそれまででしょ」

なら！

「ここが公共の場ということを忘れた二人。」

立ち上がって宣言するのは……

「私がダービーを取ります！、運だけじゃないって！、マルゼンスキーさんの無念を晴らすためにも！」

「証明して見せます」

「彼女の最強を！」

見開かれた瞳は変わらぬ桜、しかしその奥は燃え盛る炎が広がっている。

無論、冷静になれば彼女の勝利に意味はない。

マルゼンスキーはダービーに出られず、ミスターシービーが三冠を取ったことも変わらぬ。  
しない。

しかし

「わかった……、なら私はタブーを犯すよ」

最早二人は止まらない

「目指すは凱旋門、最下位からぶっ飛ばす」

もう一度繰り返すが彼女たちの行為で証明されるのは、自分の力だけだ。  
憧れの何かが変わることはない。

だが

「絶対見て「絶対見てろ」てください」

熱しにくい意識が焼けた時は

そう簡単に冷めはしない。

目指す場所も願う未来も違うが



二人は確かにここに誓った。

その夢は誰かのもの？

否

二人が創ったもの

新馬戦まで後少し

揃うは若き獅子たち

さあ

時代を紡ぐのは、桜か、灰か

それとも……

『私のトレーナーさんになってくれませんか？』

『こんな私でよければ、よろしくお願いいたします』

顔も知らない猛者たちか

激動の夏が来る。

## 修行パートは消されがち

「……機嫌だな……」

意味があると理解しながらやる練習は楽しい。

そんなことを口にしていた眼前のウマ娘は、気持ち良さそうに加速を続けている。

はつきりいって身体が壊れるんじゃないかと思うような速さで走り続けているのは異常なんだが、それ以上におかしいのはバランス感覚だな。

速度が増すのだから足が回りすぎて転ける可能性もあるし、綺麗にコーナーを曲がることなんて不可能はずだ。

それを可能にしているのは、頑丈な身体と倒れることを恐れない度胸だろう。

失速させさせなければ最強に至ることも難しくないと考える程度には魅力的な走りだ。

『お前にインターバル走は正解とはいえないな、短所を減らそうとしても、そこまで極端に才能がないと磨くだけ無駄だ、G1にや届かねえよ』

『なら何をすればいい?』

『お前の得意分野はなんだ？、スタートか？、加速か？、スタミナか？、短所は大きい  
が長所もまた極端に大きいんだからよ、そいつを伸ばしちまえ、磨がれるだけ尖つとい  
た方が確実に強い』

『了解』

そんなやり取り一つで練習メニューに階段ダッシュを入れたわけだが、これが気持ち  
良いほどにハマっていた。

階段という走るだけでも躊躇するような環境で、速度を緩めずに、レースのコーナ  
よりも短い距離で曲がることを求められるこのトレーニングは、控えめに言って普通の  
ウマ娘には勧められないタイプのものだ。

そもそも、俺がこの寺の住職の友人であり、近所の人への許可を取っているから許さ  
れているのであって、こんな場所で早朝からトレーニングさせていることが困難なんだ  
が。

だが、それを踏まえてもこいつは良い。

ただでさえ尽きないスタミナを更に強化できるのに加え、最大効率のコーナリング、  
平地から傾斜への対応、瞬時に坂道に切り替える力、一つの石で鳥の群れを全滅できる  
んじゃないだろうかと思えるほどのメリットが詰まっている。

「休憩いれるぞー！」

「わかった」

「急に止まるなよ!」

ウマ娘が本気で減速するとブレーキ跡のような形が残るからな。

コンクリートだからといって油断していると大変なことになる。

新馬戦に向けて最高レベルのコンディションなわけだからここで怪我でもしようものなら良いことは何一つない。

「ふはあ!」

美味しそうに水を飲む、担当。

初めて出会った時のお嬢様な演技は鳴りを潜め、次に出したダウンナーなキャラクターも薄まって、最後に出てきたのはゲームで良く見るクーデレタイプの少女だった。

まあ、クーデレ状態は本人も自覚していないように思えるが、それは仕方のないことだ。

強引な成長を促される環境にいたのだから、今くらいは少女らしく大人に甘えて欲しいという思いがある。

「次は何をすればいい?」

「朝言ったことを忘れてないだろうな……」

「新馬戦前だからある程度セーブしろだっけ……、自分の限界くらいわかってるけど

「限界を知ってる奴はトレーニングが終わった途端に眠ったりしないんだよー」  
かといって、トレーニングの後にすぐ眠るのは勘弁して欲しい。

シャワーを浴びろだとか、飯を食えだとか、その辺は大事なことだが迷惑はかからな  
いだらう。

でもな、ベンチや眠れる場所があつたらどこでも眠るつてのは正直面倒だから止めて  
欲しいんだが！

こいつの背丈が大したことないから何とかなっているが、人間とは筋密度が違うウマ  
娘はそもそも重いんだよ。

それを毎日抱えて寮まで運ぶ俺の身にもなってくれ、頼むから。

そんな担当の新馬戦は二日後。

本来なら似たようなコースで一日中慣らし運転と行きたいところだが、そんな権限を  
持つてるトレーナーは極一部、俺みたいな新米がコースを借りるのは難しいつてのもあ  
る。

だからこそのこの寺なわけだ。

かなりの角度がある階段、いつでも座禅していけとふざけたことを口にする住職、近  
くにいる全ての存在にお菓子と麦茶を配る奥さんとスポーツマンにはありがたいもの  
が揃つてる。

座禅に関しては集中力を鍛えるためにつてやつだな、某野球ゲームで選択枝にあるだけはある。

特にうちの担当は集中力を切らしたらその時点で敗北が決まっているような極端な奴だから余計に。

「ん？」

くりくりとした瞳がこちらを覗く。

ほんのり濡れた口元を向ける姿は無邪気な子どものようだ。

いや、子どもであることには違いないが、実年齢よりもずっと幼いように見える。

「よしー、座禅して終わらせんぞ」

「わかったけど、あれって意味あるの？」

「毎度、棒でしばかれてる奴が言っても説得力がないんだよ」

意味がないと思つたことには、我慢弱いところもまだまだガキンチョだな。

そわそわと動く耳に所在なく動く足と尻尾。

聞けば、普段の学生生活では威風堂々、喧嘩上等らしいじゃないか……。

悪意のない面の皮が厚い、とはまた違うんだろうが随分と擬態が上手いんだなと思わされる。

『いつかそのままの自分でいられるといいな』

心の中の眩きが叶うようにそつと神様にでも祈っておく。

いや、仏さんが正解かな。

ちよいとばかり急ぎすぎた蟬が鳴いている。

ミンミン、ミンミンと 眠眠……

案の定、石段に寄りかかかってい眠っている担当を起こしながら、小さく拳骨をいれるのであった。

「んじゃ、明日は軽い練習で解散だからな、今日の疲れはしっかり取り除いておけよ」  
「わかった」

今日のトレーニングは終了つと。

二週間前に、トレーナーから外部の施設に行くって言われたから、ジャージで行くのもなあと思っていたけど、たどり着いたのは郊外の山。

ウマ娘の先輩方が必勝祈願をするという神社の近くにあるお寺だった。

どうにも理解ができなくて、いろいろと訪ねることになったけど、お寺の境内を使ってトレーニングをしると言われたから、初めは、罰当たりかもとビクビクしてた。

まあ、トレーナー曰く、ここに奉られているのはウマ娘と人間の平和を願った菩薩様らしいから大丈夫らしいけど。



一番驚いたのは凄く若い住職さんから繰り出される異次元の棒捌きなんだけどさ。

すごいよね、全力で回避に思考を裂いたウマ娘に攻撃を当てるなんて普通なら無理だよ？

そんなトレーニングの果てに目指すは新馬戦。

所謂メイクデビューなんだけど、長距離がないから、少し短い2400m。

正直、本番を一度も経験してないウマ娘に走らせるには、長すぎると思うんだけど、それを理解した奴らが揃うのなら楽しい戦いになりそう。

楽に勝てるのも好きだし、どうでも良いも言うのも本音だけど、何だかんだ闘争本能は人並みにはあると思っていたい。

『そこそこ楽しめるかな？』

帰り道、蝉たちの子守唄に耳を傾けながら歩く。

喧しいと嫌う人がいることが信じられないほど優しいその音は、寮の玄関にたどり着いた私を容赦なく寝かしつけるのでした。